

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第54集

貝塚市遺跡群発掘調査概要22

2000. 3. 31

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は、波静かな大阪湾を北に望み、緑豊かな和泉山脈を南に含む穏やかな自然環境に恵まれた地域であります。そのため、昔から多くの人々がさまざまな営みを繰り返していたと考えられ、各時代の遺跡が市内各所に存在しています。これらは貴重な先人達の遺産であることから、今を生きる人間が積極的に後世に伝えていく努力をしなければならないのです。しかし、わが市においても、近年の都市化現象により徐々に減少しております。

今回、平成11年度中に実施いたしました緊急発掘調査の結果を報告いたします。開発に伴う調査で、その大部分が非常に小規模ではありますが、現市域に住んでいた先人達の生活を考える上で欠かせない多くの成果を得ることができました。本書を刊行することにより、皆さまの文化財に対するご理解を深めていただく一助となれば幸いに存じます。

また、発掘調査ならびに本書の作成にあたり、関係各位には多大なご指導、ご協力をいただき、深く感謝申し上げます。やがて、文化財が住環境をより豊かなものにしてくれることと存じます。今後とも本市文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願いする次第であります。

平成12年3月31日

貝塚市教育委員会

教育長 福井 昱彦

例 言

1. 本書は、貝塚市教育委員会が平成11年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告である。
なお、遺物整理の都合から一部平成10年度調査についても掲載している。
2. 発掘調査は貝塚市教育委員会教育部社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、上野裕子、木嶋崇晴が担当し、平成11年4月1日より調査を実施し、平成12年3月31日に終了した。
3. 本書の執筆は前川、上野、木嶋の各現地担当者が行い、編集は前川、上野が行った。
4. 図22～24以外の調査図面内位置図は縮尺1/5,000、方位上が北に統一している。
5. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会にて保管している。

目 次

はじめに

例 言

目 次 (本文目次、図版目次、挿図目次)

第1章 平成11年発掘調査の概要	1
第2章 調査結果	
I 貝塚寺内町遺跡	7
98-29区、98-41区、99-20区、99-22区、99-27区、99-34区	
II 海塚遺跡 98-33区、99-39区	13
III 沢城跡 98-37区	14
IV 秦廃寺 98-40区、99-35区	15
V 地藏堂廃寺 98-42区、99-6区	17
VI 名越遺跡 99-1区、99-46区	18
VII 半田遺跡 99-2区	20
VIII 沢共同墓地遺跡 99-4区	26
IX 石才遺跡 99-7区	27
X 土生遺跡 99-11区	27
XI 新井ノ池遺跡 99-14区	28
XII 脇浜遺跡 99-16区、99-21区	30
XIII 清見遺跡 99-17区	31
XIV 加治・神前・畠中遺跡 99-25区、99-50区、99-56区	32
XV 森下代遺跡 99-37区	34
XVI 三ヶ山西遺跡 99-40区、99-55区	35

挿 図 目 次

- 図1 貝塚市遺跡分布図
- 図2 調査地位置図
- 図3 調査地位置図
- 図4 調査地位置図
- 図5 調査地位置図
- 図6 98-29区
- 図7 98-41区
- 図8 99-20区
- 図9 99-22区
- 図10 99-27区
- 図11 99-34区
- 図12 98-33区
- 図13 99-39区
- 図14 98-37区
- 図15 98-40区
- 図16 99-35区
- 図17 98-42区
- 図18 99-6区
- 図19 99-1区
- 図20 99-46区
- 図21 99-2区
- 図22 99-2区 平面図、断面図
- 図23 99-2区 断面略図、断面図
- 図24 99-2区 出土遺物
- 図25 99-4区
- 図26 99-7区
- 図27 99-11区
- 図28 99-14区
- 図29 99-16区
- 図30 99-21区
- 図31 99-17区
- 図32 99-25区
- 図33 99-50区

図34 99-56区

図35 99-37区

図36 99-40区

図37 99-55区

図 版 目 次

図版1 貝塚寺内町遺跡 (98-29区)

- 1、調査区全景
- 2、S E - 1

図版2 海塚遺跡 (98-33区)

- 1、調査区全景
- 2、南側断面

図版3 半田遺跡 (99-2区)

- 1、第1調査区第2遺構面
- 2、第1調査区第5遺構面

図版4 半田遺跡 (99-2区)

- SD-3下層(6~8)、SD-3中層(9、10)、SD-3上層(11、13、24、25)、SD-3(19、21~23、26、27、29、30)、SD-3(20)、第2層(28)

図版5 新井ノ池遺跡 (99-14区)

- 1、1区全景
- 2、堤部分

図版6 森下代遺跡 (99-37区)

- 1、調査区全景
- 2、SD-4

表 目 次

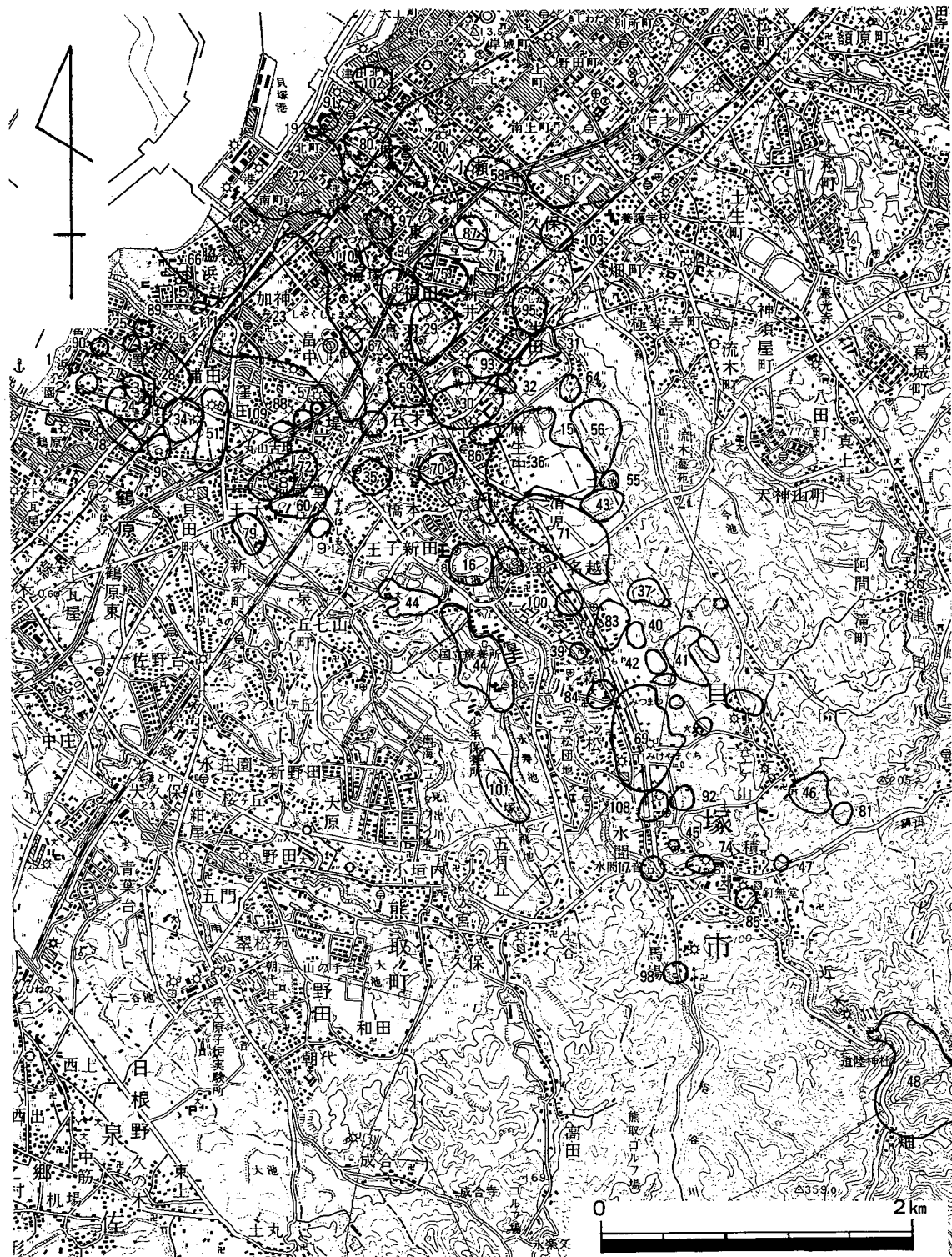
表1 平成11年国庫補助事業一覧
(平成11年1月~12月)

第1章 平成11年の調査概要

平成11年は埋蔵文化財発掘届出書提出数269件、遺跡外試掘調査依頼26件を数える。届出に関わる発掘調査60件、立会調査58件を実施した。慎重工事扱い151件である。遺跡外は16件を実施し、内1件については遺跡発見届出書により麻生中遺跡の範囲拡大登録を行った。60件の内国庫補助対象となる個人専用住宅建設に伴う調査は26件である。

	遺跡名	調査番号	遺跡略称	開発地
	(平成10年度)			
1	貝塚寺内町遺跡	98-29	JN	南町1181
2	海塚遺跡	98-33	UD	海塚226-4の一部
3	沢城跡	98-37	SJ	沢1286-1
4	秦廃寺	98-40	HT	半田705-5
5	貝塚寺内町遺跡	98-41	JN	近木1064-2他
6	地藏堂廃寺	98-42	GZZH	地藏堂246-9
	(平成11年度)			
7	名越遺跡	99-1	NG	清児424-3
8	沢共同墓地遺跡	99-4	SKB	沢897-1の一部
9	地藏堂廃寺	99-6	GZZH	地藏堂261
10	石才遺跡	99-7	IS	石才574
11	土生遺跡	99-11	HB	久保245-4
12	脇浜遺跡	99-16	WH	脇浜3-436-1の一部
13	清児遺跡	99-17	SG	麻生中614-1の一部
14	貝塚寺内町遺跡	99-20	JN	北町79-7
15	脇浜遺跡	99-21	WH	脇浜2-579-3
16	貝塚寺内町遺跡	99-22	JN	南町1360-1、1360-13
17	加治・神前・畠中遺跡	99-25	KKH	畠中2-325-1
18	貝塚寺内町遺跡	99-34	JN	北町79-6、79-5、122-83
19	秦廃寺	99-35	HT	半田710-3
20	森下代遺跡	99-37	MS	森435-1
21	海塚遺跡	99-39	UD	海塚182-2
22	三ヶ山西遺跡	99-40	MYN	三ツ松1464-1の一部、1464-3の一部
23	名越遺跡	99-46	NG	清児1036-2、1037の一部
24	加治・神前・畠中遺跡	99-50	KKH	畠中301
25	三ヶ山西遺跡	99-55	MYN	三ツ松1472-1
26	加治・神前・畠中遺跡	99-56	KKH	加神2-145、146、147

表1 平成11年国庫補助事業一覧(平成11年1月~12月)



1. 沢新出遺跡 2. 沢海岸遺跡 3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 丸山古墳 8. 地藏堂廃寺 9. 下新出遺跡 10. 樂廃寺 11. 海岸寺山須恵器窟跡 12. 海岸寺山墳墓遺跡 13. 海岸寺山南須恵器窟跡 14. 海岸寺山古墳 15. 麻生中新池遺跡 16. 河池遺跡 17. 水間寺遺跡 18. 木積観音寺跡 19. 泉州麻生塩釜出土地 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡 23. 加治・神前・皇中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢遺跡 29. 新井・鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 31. 半田遺跡 32. 麻生中遺跡 33. 熊野街道一里塚 34. 源池遺跡 35. 積善寺城跡 36. 清見遺跡 37. 藤原池遺跡 38. 高井天神廃寺・高井城跡 39. 森城跡 40. 森日遺跡 41. 森ノ大池遺跡 42. 森A遺跡 43. ニッ池遺跡 44. 千石堀城跡 45. 水間墓地 46. 三ヶ山城跡 47. 片山墓地 48. 蛇谷城跡 49. 根福寺城跡 50. 藪原城跡 51. 窪田遺・窪田廃寺 52. 葛城山頂遺跡 53. 坊城遺跡 54. 三ッ松遺跡 55. 櫛ヶ谷城跡 56. 半田遺跡 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 61. 土生遺跡 64. 海岸寺山遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 68. 三ヶ山遺跡 69. 三ヶ山西遺跡 70. 石才南遺跡 71. 名越遺跡 72. 地藏堂遺跡 73. 名越西遺跡 74. 木積遺跡 75. 新井・鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 80. 津田遺跡 81. 三ヶ山才二谷遺跡 82. 福田遺跡 83. 森下代遺跡 84. 三ヶ松北垣外遺跡 85. 薬師池西遺跡 86. 麻生中出口遺跡 87. 小瀬遺跡 88. 堤三宅遺跡 89. 沢新開遺跡 90. 沢タナジリ遺跡 91. 堀新遺跡 92. 橋池遺跡 93. 麻生中下代遺跡 94. 堀秋毛遺跡 95. 半田北遺跡 96. 沢老ノ塚遺跡 97. 東遺跡 98. 馬場遺跡 100. 鳥の池西遺跡 101. 白地谷遺跡 102. 津田北遺跡 103. 久保遺跡 108. 水間二ノ戸遺跡 109. 窪田ハマデ遺跡 110. 海塚遺跡 111. 脇浜川端遺跡

図1 貝塚市遺跡分布図

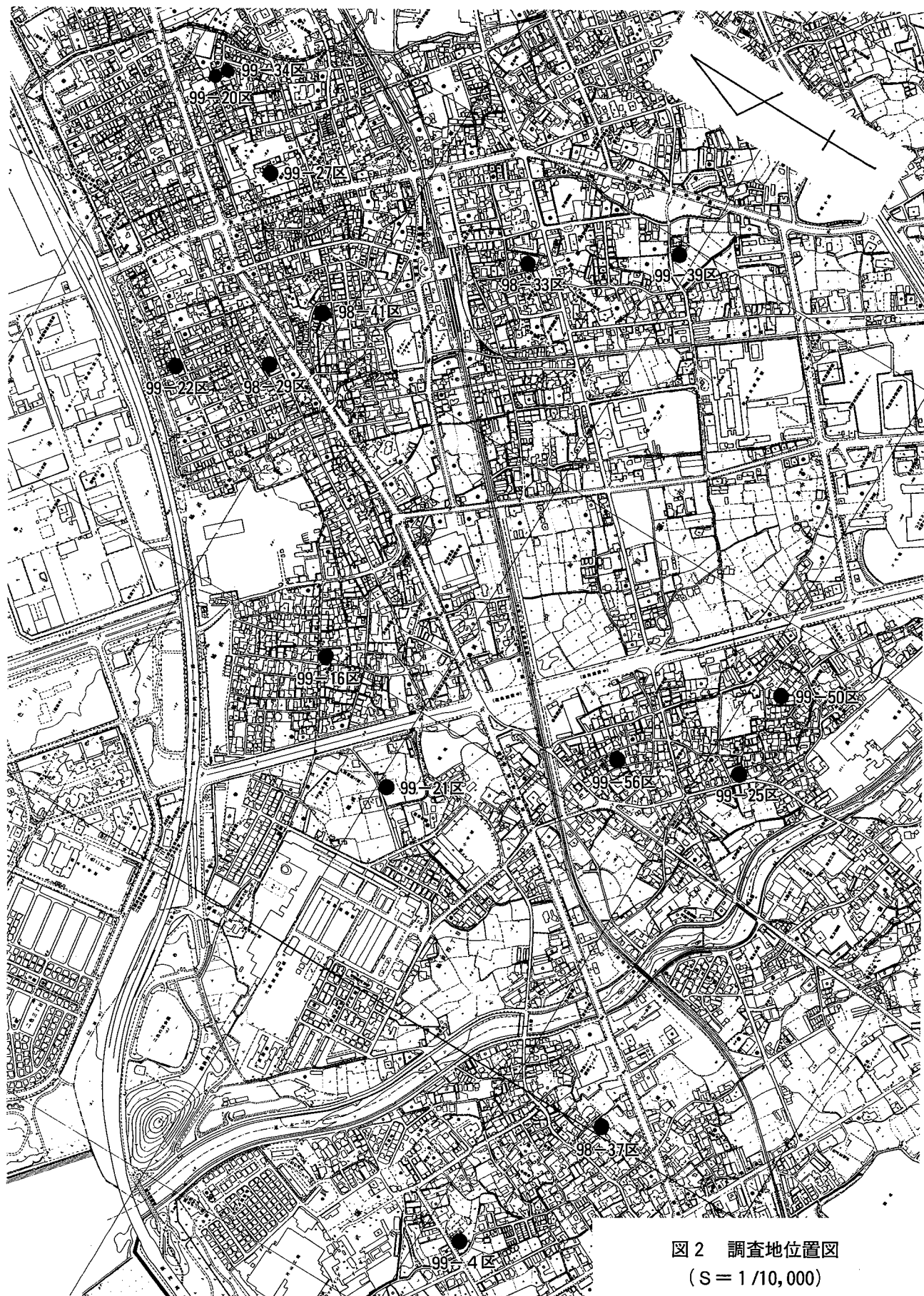


図2 調査地位置図
(S = 1/10,000)

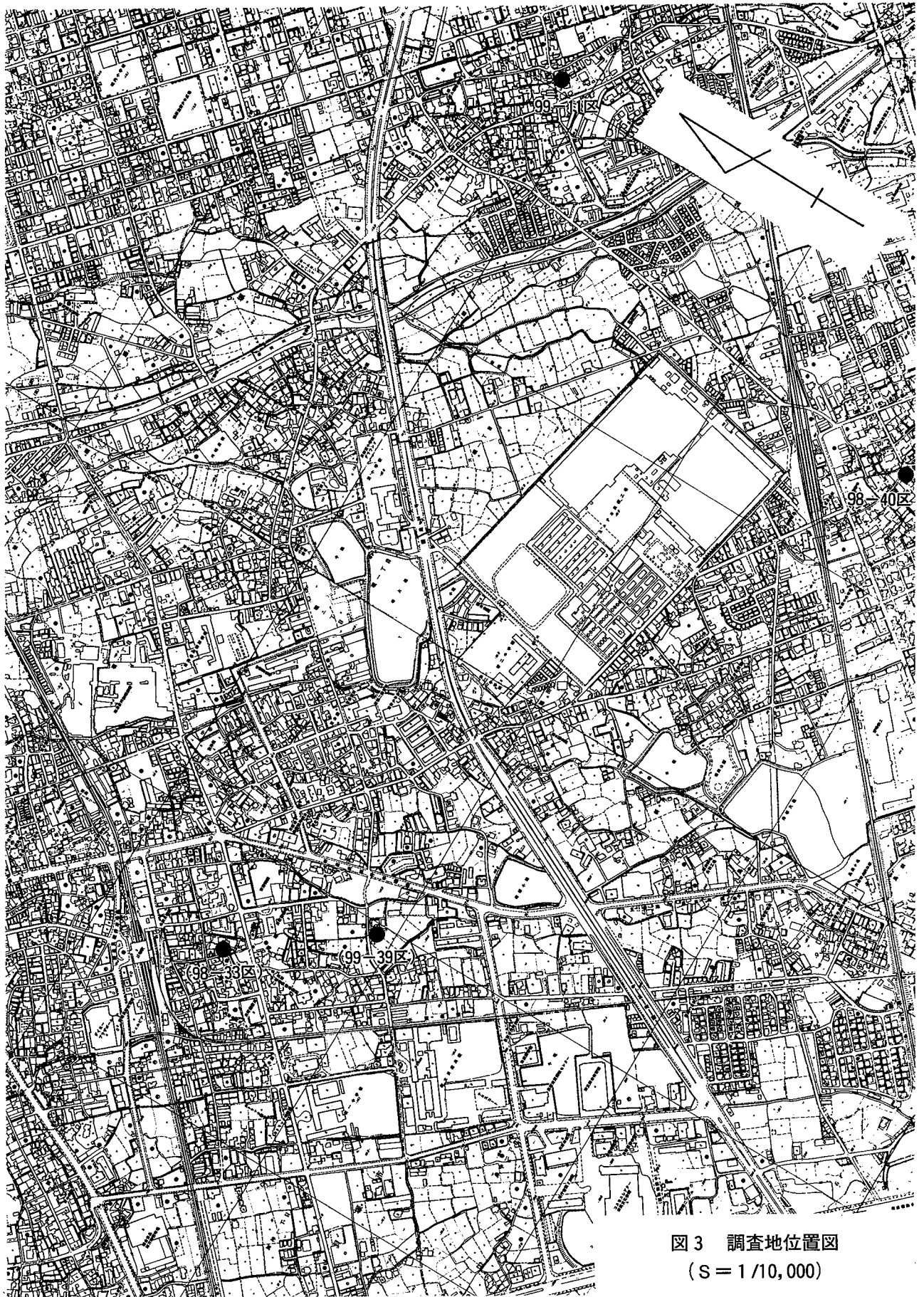


图3 調査地位位置図
(S = 1/10,000)

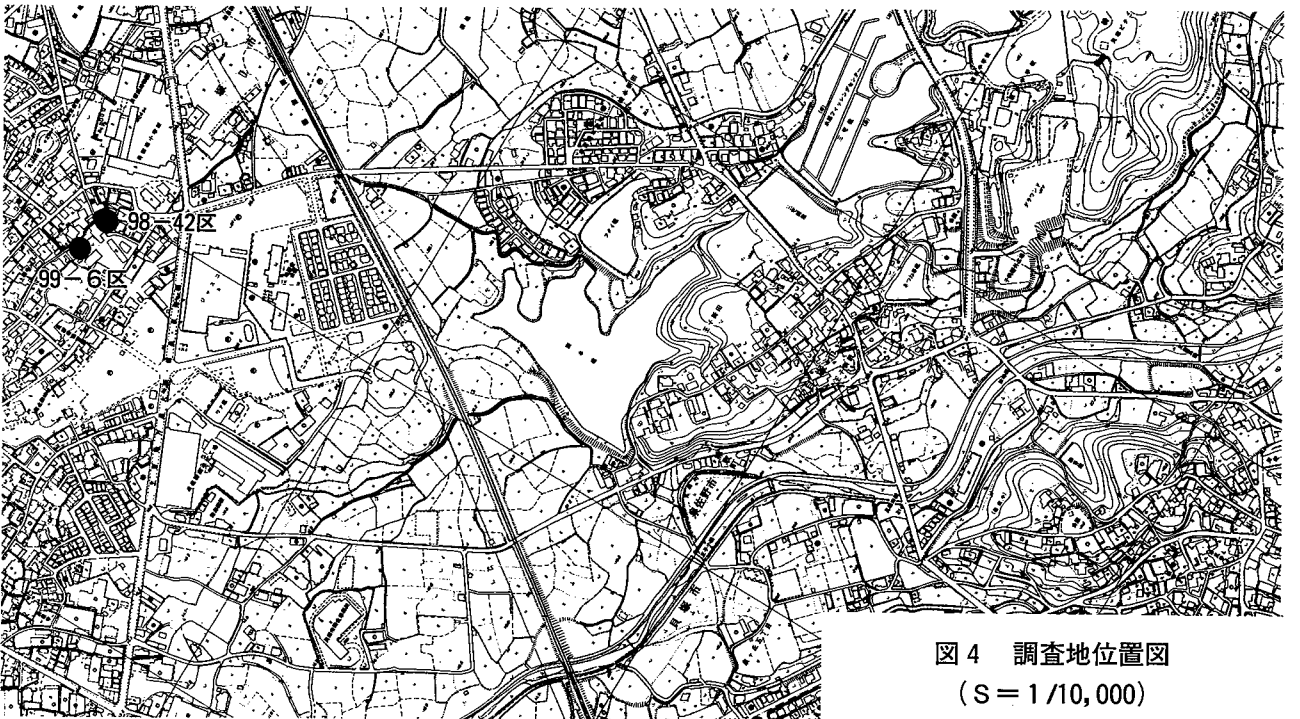
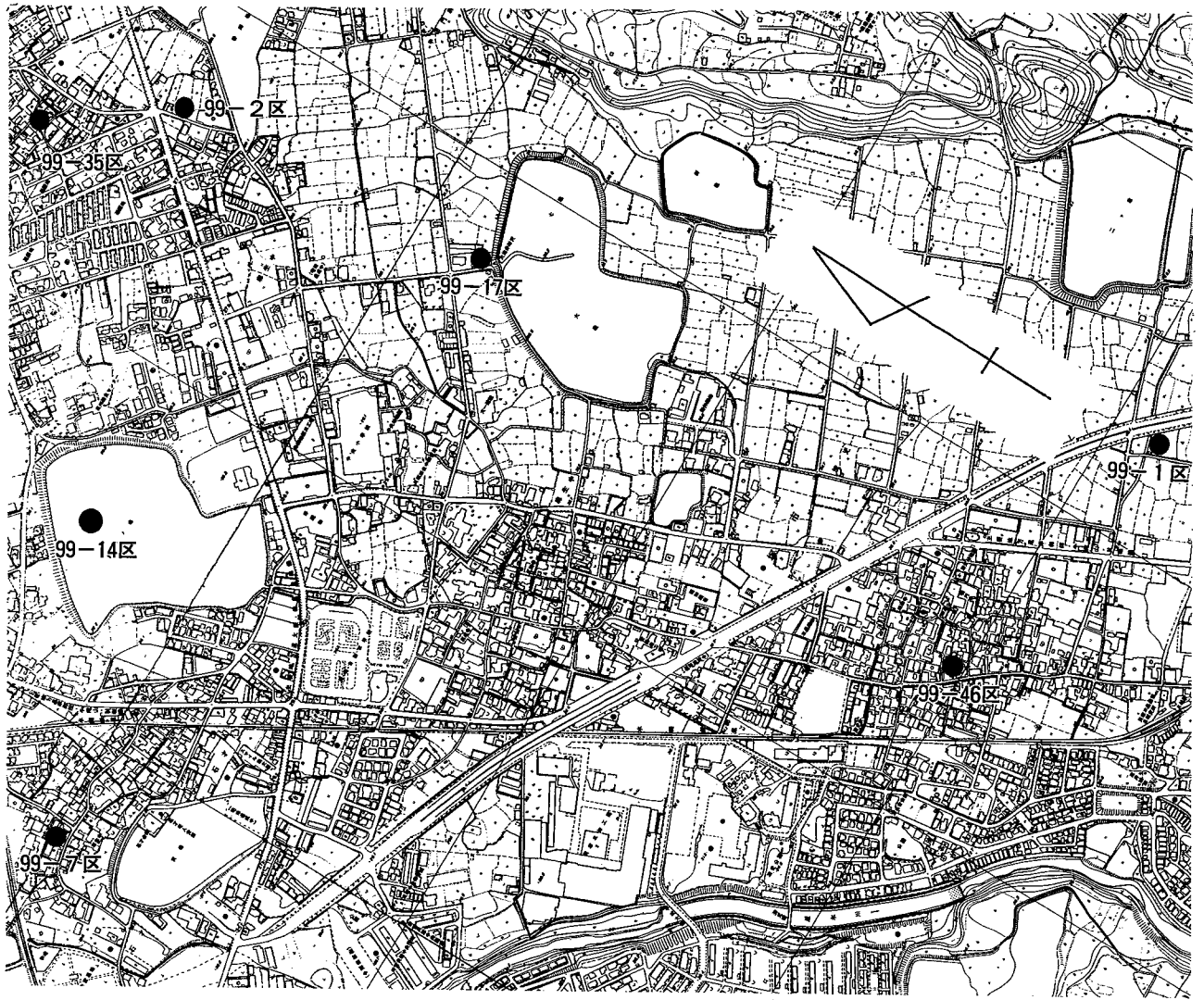


図4 調査地位置図
(S = 1/10,000)

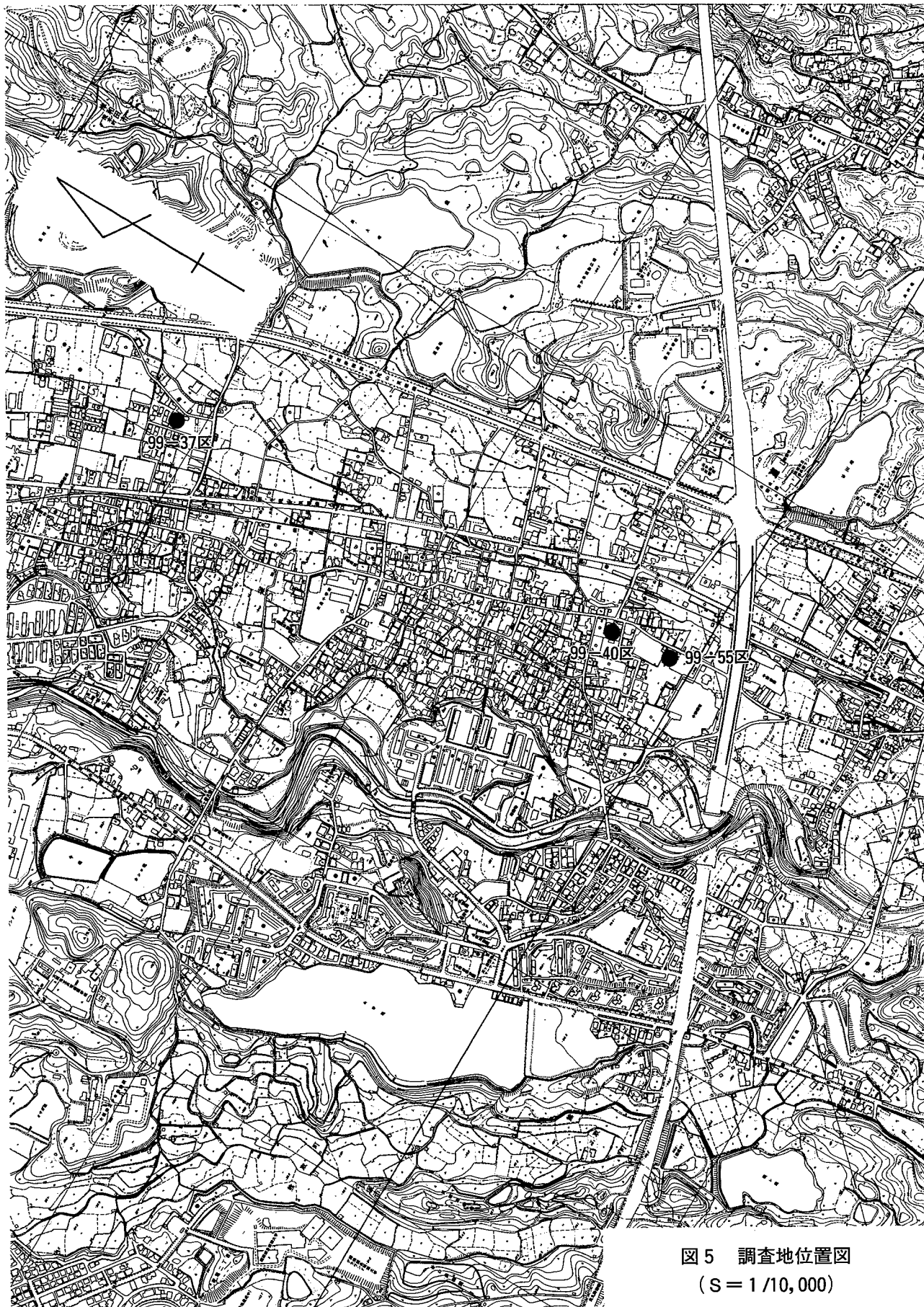


図5 調査地位置図
(S = 1/10,000)

第2章 調査結果

I 貝塚寺内町遺跡

98-29区の調査

貝塚寺内町遺跡は貝塚市北部の大阪湾に面し、砂堆部から中位段丘端部にかけての海拔2～9mを測る地点に位置する。北側は北境川、南側は清水川、東側は南海本線までの部分がある範囲である。北東～南西約800m、南東～北西約550mを測る。寺内の中心寺院は願泉寺であり、近世には願泉寺住職「卜半」が寺内地頭として、絶大な支配力を誇った。今回の調査地は貝塚市南1181である。

調査地西部に北西～南東方向の調査区(1.5×9m)を設定して実施した。調査区内の基本層序は、近代以降の整地層(第1層、層厚約0.2m)の下に、地山となる淡黄色粗砂層がある。現地表面標高は約2.3mを測る。堆積状況・標高からすると、調査地は清水川右岸の微高地(自然堤防)と考えられる。遺構については、近代からの建設行為によってそれ以前の状況は明確ではない。調査地の長辺に対するほぼ中央には瓦積井戸が露出していた。その内側にはコンクリート製井筒が入れられており、近世以降現在まで使用されている。当初の井戸堀形を検出したが、その他は明確ではなく、北端にて近世末頃の土坑、南半では整地層の痕跡を確認したのみである。

遺物はSK-1より陶磁器が出土した。

(前川)

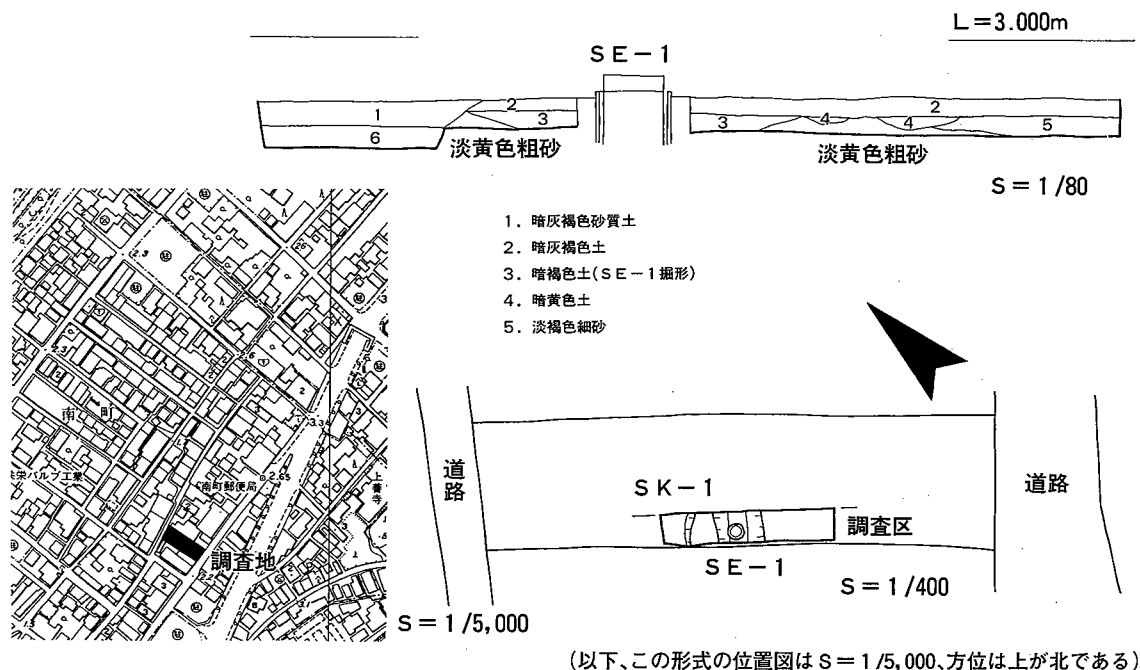


図6 98-29区

98-41区の調査

今回調査を実施したのは貝塚市近木1064-2他である。調査地は階段状に3段になっており、調査は工事計画に基づき、各段に計4ヶ所のトレンチを設定した。また各トレンチの基本層序番

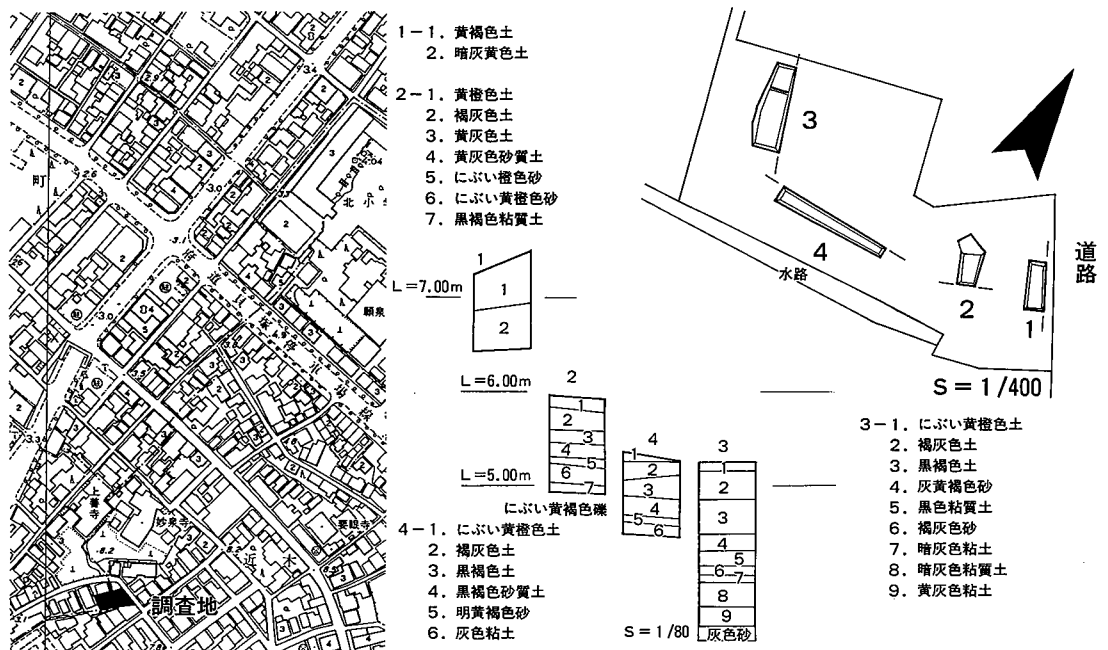


図7 98-41区

号は混乱をさけるため、異なる数字をあてている。第3・4トレンチは数字を対応させている。

第1トレンチ（1×2.5m）基本層序は2層に大別できる。第a層は黄褐色土（厚さ0.4～0.5m）、第b層は暗灰黄色土（厚さ約0.3m）である。第a・b層は盛土である。第b層からは瓦・陶磁器が出土した。

第2トレンチ（1×2m）基本層序は8層に分けられる。A層は黄橙色土（厚さ0.12m）、B層は褐灰色土（厚さ0.2m）、C層黄灰色土（厚さ0.12m）、D層は黄灰色土（厚さ0.14m）{C層よりも砂を多く含む}、E層はにぶい橙色砂（厚さ0.1m）、F層はにぶい黄橙色砂（厚さ0.2m）{小レキが混ざる}、G層は黒褐色粘質土（厚さ0.08m）{砂が多く混ざる}である。H層は地山でにぶい黄褐色レキ層である。A～E層は盛土と考えられる。B・C層はコークス・レンガが多量に混ざる。またE層は第4トレンチの第5層と土質が似る。

第3トレンチ（1.5×4.5m）基本層序は11層に分けられる。第1層はにぶい黄橙色土（厚さ0.1m）、第2層は褐灰色土（厚さ0.3m）、第3層は黒褐色土（厚さ0.38m）、第4層は灰黄褐色砂（厚さ0.18m）、第5層は明黄褐色砂（厚さ0.08m）、第6層は黒色粘質土（厚さ0.18m）、第7層は褐灰色砂（厚さ0.1m）、第8層は暗灰色粘土（厚さ0.08m）、第9層は暗灰色粘質土（厚さ0.26m）

{第8層よりも砂が多量に混ざる}、第10層は黄灰色粘土（厚さ0.2m）{砂が混ざる}である。第11層は地山で灰色砂である。第1～5層は盛土と考えられる。第3・4層からは陶磁器・瓦が多量に出土した。第7層からは瓦が多数、第8層からは摺鉢が出土した。第9層より下層からは遺物は出土しなかった。第3トレンチの西側から瓦溜りを確認した。瓦溜りは西側断面で現状地盤から0.9mまで確認できた。瓦溜りの瓦は新しいものであり、土坑を掘って棄てたものと考えられる。第3トレンチの西側付近では瓦が地面から露出していた。また瓦と窯壁ブロックが数点出土した。

第4トレンチ(0.8×6.3m) 基本層序は6層に分けられる。第1層はにぶい黄橙色土(厚さ0.14m)、第2層は褐灰色土(厚さ0.16~0.3m)、第3層は黒褐色粘土(厚さ0.1~0.3m)、第③は黒褐色粘質土(厚さ0.1~0.2m)、第5層は明黄褐色砂(厚さ0.1m)、第6層は灰色粘土(厚さは不明)である。本トレンチは第6層まで掘削した時点で湧水が激しく、以下の掘削は中止した。第1~5層は盛土と考えられる。第3・③層からは陶磁器・瓦が多数出土した。また第5層は第3トレンチの第5層と対応すると考えられる。

調査地は東から西へ大きく傾斜しており、そのため盛土を行い階段状にする。第3トレンチでは約1m近く盛土が行われており、時期は明治以降と考えられる。また第6~8層からは瓦・陶磁器が出土しており、時期は近世後半と考えられる。(木嶋)

99-20区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市北町79-7である。調査は調査地北東側に、幅北側3m、南側1.5m、長さ約5mの南北調査区を設定し実施した。

調査区では、現駐車場の整地土(第1層、層厚0.3m)の下に約3面の生活面を確認した。第1面は灰黄色粘質土層(第5層、層厚0.1m)を整地土とする上面。上から旧テザック工場の攪乱層が掘り込まれている。第2面は暗赤褐色極細砂~粘質シルトやにぶい黄色砂礫混粘質土(第6、10層、層厚0.2~0.3m)を整地土とする面である。灰褐色砂礫混土を埋土とする土坑が上から掘り込まれている。第3面は灰黄色砂礫~粗砂(第12、13層、層厚0.1~0.15m)を整地土とする上面。焼土を含む土間状遺構が存在する。地山は黄灰色砂礫層で、現地表面より約0.8mにて検出した。地山上面での遺構は無い。これらの生活面の年代については、上面から掘り込まれている遺構埋土の状態や、整地状況からすべて近代以降と考えられる。

調査地の北~西側には寺内の北端を限る北境川が流れている。調査地を含む願泉寺~北境川に

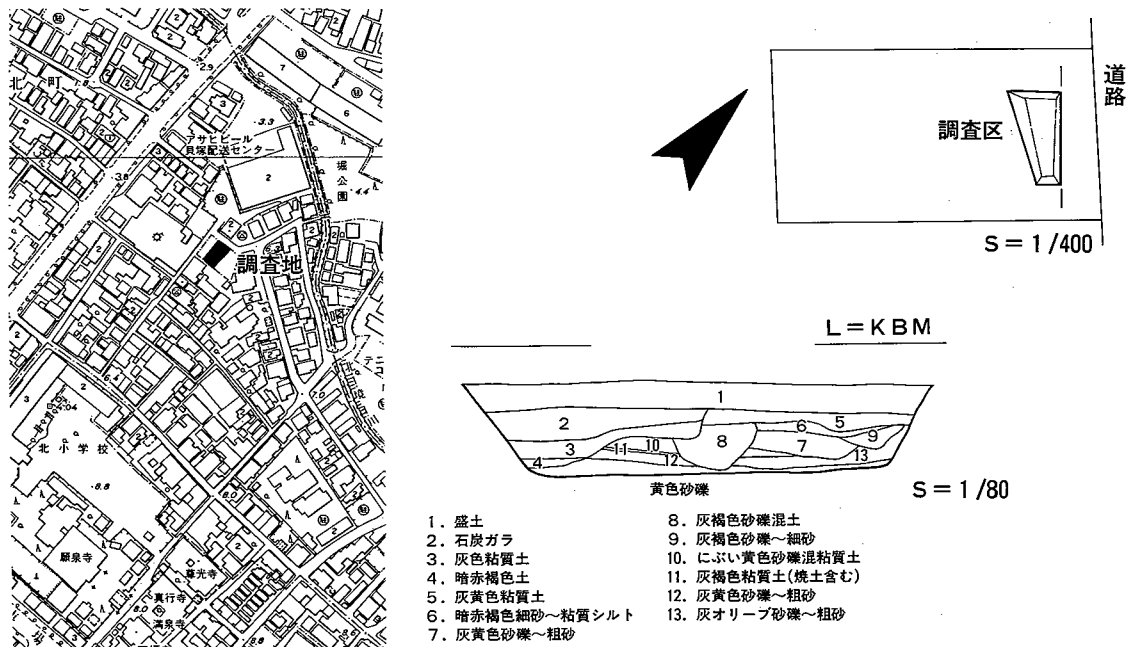


図8 99-20区

かけての一带は寺内の中でも最も開発が遅れた部分であることは、絵図から伺える。さらに調査区西の北境川河岸部で98年度に行った調査では、近代に盛土されて嵩上げされている状況が確認された。このように調査地周辺では近代以降活発な開発が行われ、以前の遺構が希薄であることが判明した。遺物は第5層上面より掘り込まれた攪乱層の中から和泉音羽焼3点、肥前磁器2点が出土した。

(上野)

99-22区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市南町1360-1他である。調査地北部に1×5.5mの調査区を設定した。

基本層序は第1層：盛土（厚さ0.3m）、第2層：にぶい黄橙色砂（厚さ0.2~0.4m）、第3層：暗灰黄色砂（厚さ0.1~0.2m）、第4層：灰黄褐色砂・炭が多量に混じる（厚さ0.2m）、第5層：灰黄色砂（厚さ0.5m）、第6層：にぶい黄色粗砂（地山）が堆積する。第6層は人間の生活痕跡が認められない層である。

第6層上面より褐灰色砂・炭が多量に混じる（深さ0.5m）が掘り込まれている。掘り込み底部には炭・焼土が薄く堆積する。遺物は掘り込み、第5層を中心に瓦、染付茶碗、陶器が出土した。

(木嶋)

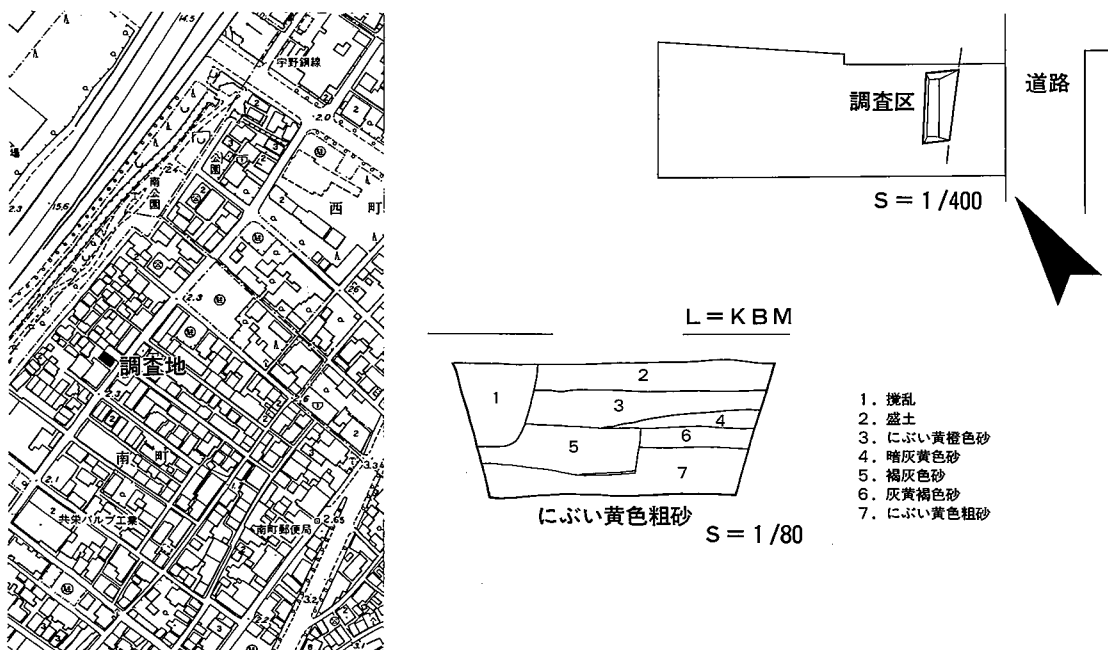


図9 99-22区

99-27区の調査

今回の調査は平成11年度国庫補助事業として実施された国重要文化財願泉寺（貝塚市中946）における消火用放水銃設置工事に伴うものである。本工事は境内北側に接する市立北小学校屋内運動場地下に設置された防火水槽を利用することが前提となっているため、調査対象となったのは地下埋設管部分工事である。掘削幅0.3~0.5m、総延長約270m、掘削深0.6~0.8mを測る。

掘削は防火水槽に近い北側部分から開始し、離れ棟東側~書院（A地区）、書院西側（D地区）、

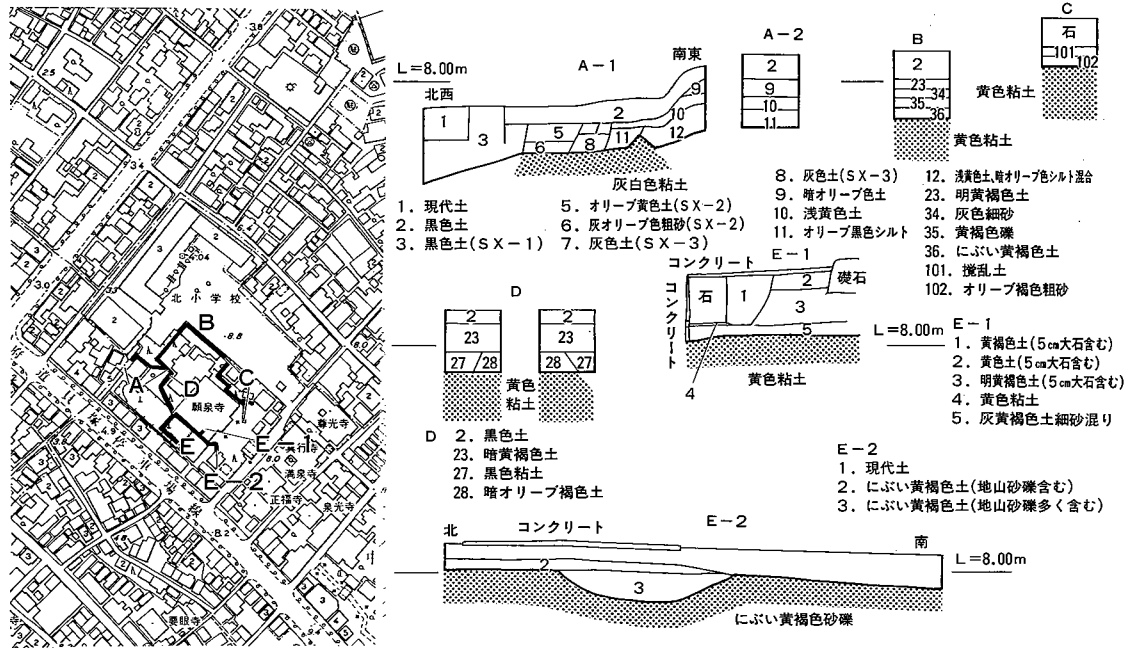


図10 99-27区

庫裡北・東側（B地区）、本堂東側（C地区）、本堂西～南側、墓地（E地区）の順に行い、地区名称は工事設計にある掘削区間名を使用した。細長い掘削に伴って調査を実施したため、面的に遺構等を把握できたところは少なく、また、埋設管掘削深度よりも深く掘削することが不可能であったため地山を検出したところも少ない。しかし、境内をほぼ全周する形での掘削であり、江戸期から現在にかけての堆積状況を知るための貴重な調査となった。

現状の地表面を形成する黒色土（一部現代マサ土）を除去すると、明治期の地表面が現れ、礎石等の遺構はこの面にある。以下、概要を地点毎にまとめる。

A地点（離れ棟から書院）

本地点は段丘端部にあたり、書院との中間地点に庭造成の段差があり、段差から堆積状況が異なる。段差の下に当たる離れ棟の周辺は、近世後半以降の瓦を大量に含む造成が最低3回行われている。これらは段丘端部に向かって行われており、旧地形は大幅に改変されていることが判明した。これらの瓦は明治初頭に解体されたト半役所に使用されたものと考えられる。地山は段差部分近くの現地表下約0.5mにて検出したが、山状に高まった一部を検出したのみであり、北側、南側に低くなっていく。

段差上は3層以上の整地層を確認できるが、東半はそれを切り込む様に粗砂の土坑状の遺構が存在する。これも整地層と考えられるが、非常に脆弱であり、何を目的とするものかは不明である。遺物も瓦片が少量出土するのみであり、時期は不明である。

B地区（庫裡北・東側）

北側はA地区から庫裡にかけては3～4層の整地層が存在する。しかし、明確な遺構は明治期までの地表面からの埋甕のみであり、その他の整地層上面からの掘込みはない。遺物も各層瓦が少量出土するのみであり、時期の判断は困難であるが、概ね近世後半以降のものと考えられる。

庫裡周辺は、市立北小学校との敷地境にブロック塀があり、その基礎工事によって破壊を受けており整地層の存在は確認できない。ただし、地山を確認できる所が一部あり現地表面から約0.8mにおいて確認した。

C地区（本堂東側）

本地区はカクランが少ないため、最も堆積状況は把握しやすい。現地地表下約0.6mにて黄色粘土の地山を確認し、標高8～8.2mに地山が存在することを面的に確認できた。その上面には2層の整地層が存在する。遺構は無く、整地層からの遺物出土もなく時期は不明である。

D地区（書院北～西側）

A地区から続く粗砂の整地層が存在するが、書院北側部分東半で途切れる。これが何を意味するのは判断できないが、粗砂が全面に広がるものではなく、部分的なものであることは判明した。書院北側西半は現地地表下約0.5mにて地山（黄色粘土）を検出し、その上には1～2層の整地層が存在する。

書院西側はカクランによって整地層は存在しないが、地山の黄色粘土は地表下約0.6mにて確認できる。このカクランは庭造成時の盛土と見られる。

E地区（本堂西～南側、墓地）

本地区は今回の範囲では最も状況の悪い所である。墓地部分は近世にはなく、明治以降に大幅な盛土によって造成しており、管掘削に深さでは地山も確認できない。本堂西側にもこれが続く。南側も昭和に建設された会館の附帯工事によって大幅なカクランを受けている。ただ、本堂を過ぎたE地区南端では、現地表した約0.3mにて礫層の地山を、その上面には1層の整地層を確認した。また、地山を掘り込む状況で土坑を1カ所検出した。土坑は遺物が無く時期は不明であるが、整地層共に幕末から明治頃のものと考えられる。

消火栓引き込み部分

C、E地区においてそれぞれ一カ所本堂内に消火栓の引き込み管工事を行い、本堂基壇の一部を掘削した。C地区では、現地地表下約0.6mにおいて地山（黄色粘土）を検出し、その上には層厚約0.3mを測る黄色シルトを入れ、シルトの上に3～5cmを測る石を多量に含んだ黄色土を積み基壇としている。E地区は現地地表下約0.7mにおいて地山（黄色粘土）を検出した。こちらはその上に層厚約0.1mを測る細砂混じりの灰黄褐色土を入れ、その上に層厚約0.1mを測る明黄褐色土、層厚約0.15mを測る黄色土を積み基壇としている。両層とも石を多量に含む。こちらでは礎石との関係が把握でき、明黄褐色土を積んだ後、礎石を据えている。両地区共地山は標高約8.1mを測る。遺物はない。

全体を総合すると、地山は標高8m前後に存在し、各部分で異なった整地が行われる。遺物が非常に少なく時期の判定は困難であるが、全体の印象では近世後半以降のものであると考えられる。明確な遺構は幕末～明治期に限られる。 (前川)

99-34区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市北町79-6他である。調査地東部に1.5×0.5mの調査区を設定し

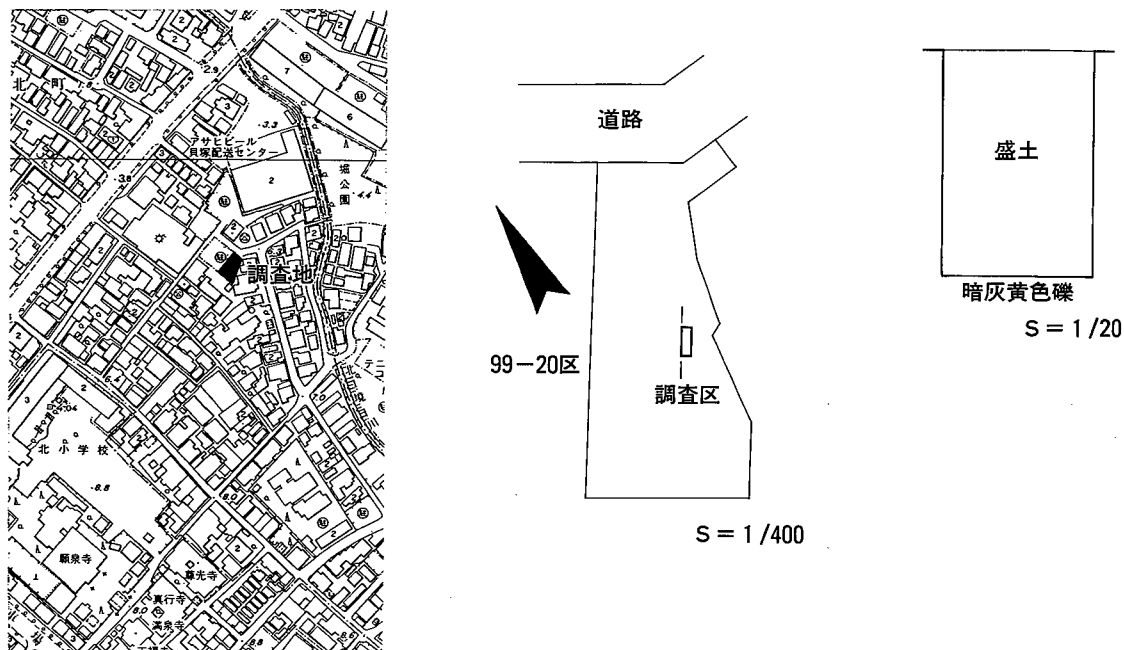


図11 99-20区

実施した。調査区内の基本層序は0.6mを測る盛土を除去すると暗灰黄色礫（地山）が存在する。盛土内より瀬戸焼磁器染付碗は出土するものの、この土層の成立は近代以降のものと考えられる。遺構、遺物包含層は存在しない。（前川）

II 海塚遺跡

98-33区の調査

海塚遺跡は本市北西部、大字「海塚」の存在する中世遺跡である。中位段丘上に位置し、周辺標高12~15mを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市海塚226-4である。

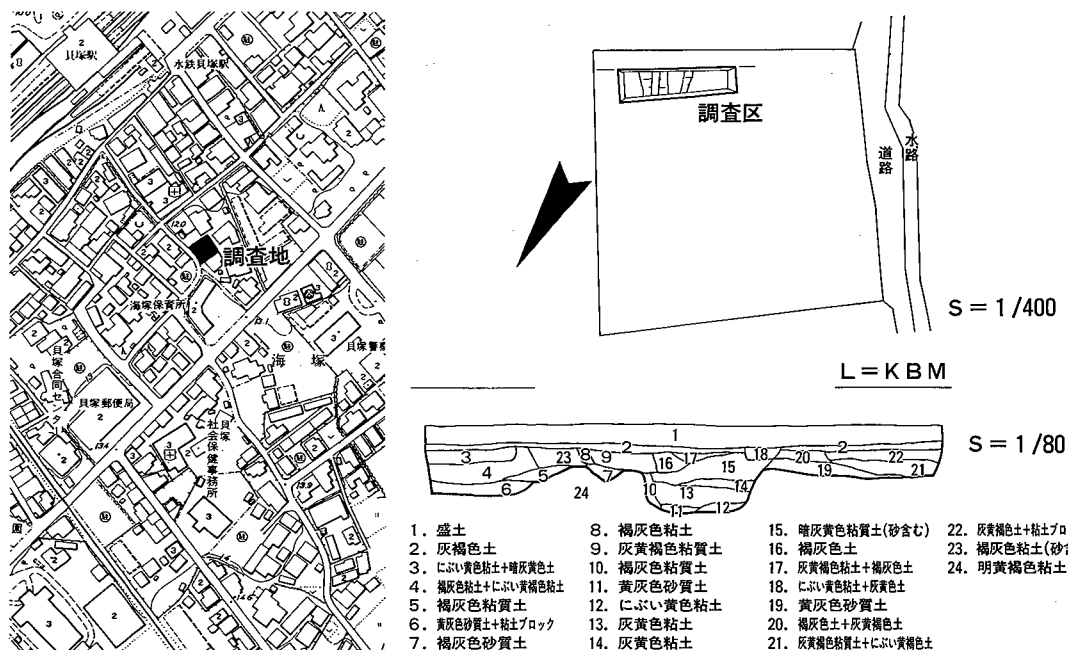


図12 98-33区

調査は工事計画に基づき、1×9m調査区を設定した。基本層序は第1層は盛土（厚さ0.2m）、第2層は灰褐色土（厚さ0.06m）、第3層は褐灰色土・灰黄褐色土が混じる（厚さ0.1m）、第4層は黄灰色砂質土（厚さ0.1m）、第5層は明黄褐色粘土（地山）である。

第3層上面にて粘土取り遺構と考えられる土坑を2基検出した。西側土坑を土坑1、東側土坑を土坑2とする。土坑1は検出幅1.7m、深さ約0.6mを測り、埋土は暗灰黄色粘質土（砂が多く混じる）である。土坑2は検出幅2m、深さ0.45mを測り、埋土は褐灰色粘土（にぶい黄褐色粘土が混じる）である。これらの土坑は重複関係にあり、土坑1が第3層より掘り込まれており、その後土坑2が土坑1の一部を含めて東側に大きく掘削を行っている。土坑2より土師器皿が出土している。（木嶋）

99-39区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市海塚182-2である。調査は調査地北側に、南北方向の約2.5×3mの調査区を設定し実施した。

調査区内には5層の土層が堆積していた。上から順に盛土（第1層、層厚0.25~0.45m）、褐灰色土（第2層、層厚0.15~0.45m）、黄灰色土（第3層、層厚0.1m）、褐灰色粘質土（第4層、層厚0.1m）、褐灰色砂礫混粘質土（第5層、層厚0.1m）である。地山は黄色粘土で、現地表面より0.6mで検出した。遺構はなく、遺物は第4層より土師器が出土した。（上野）

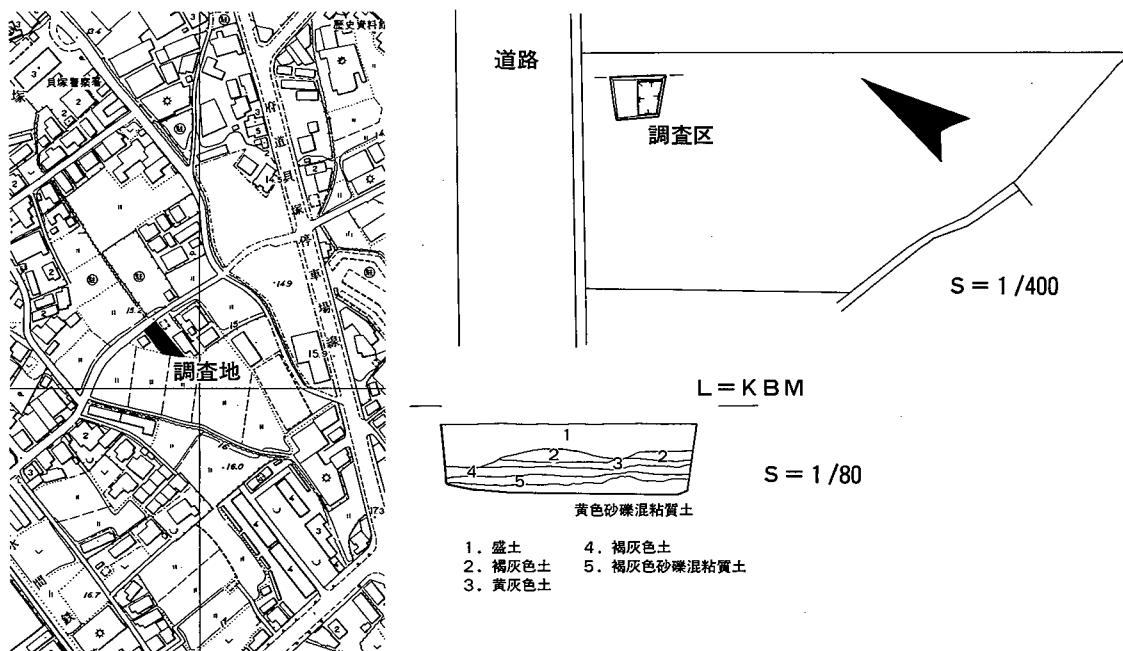


図13 99-39区

Ⅲ 沢城跡

98-37区の調査

沢城跡は本市中央を縦断する近木川左岸の段丘上に位置し、標高約8~11mを測る。周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が多数存在し、本市における遺跡集中地域のひとつである。今回の調査地は貝塚市沢1286-1である。

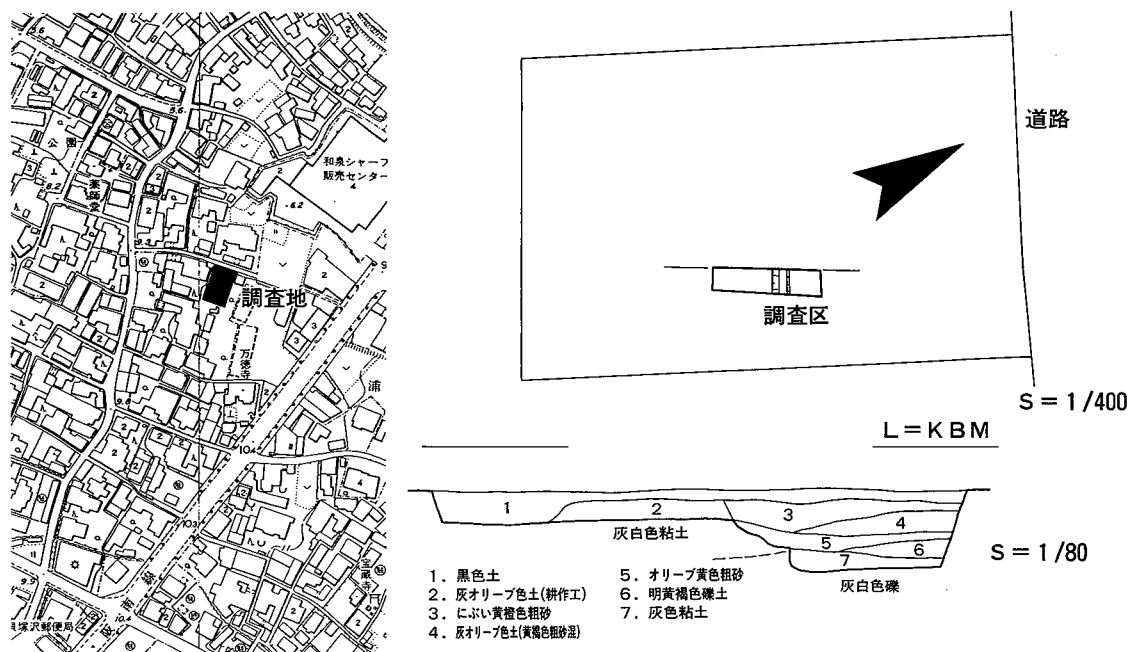


図14 98-37区

調査対象地東側、南北方向に対するほぼ中央に、南北方向の調査区（15×6 m）を設定し調査を実施した。調査区内の地山は北側が現地地表下約0.8m、南側が約0.3mに存在し、北側が低い。調査区のほぼ中央を縦断して段があり、北側は灰白色礫、南側は灰白色粘土である。南側は周辺地域にて確認できる黄色粘土が存在しないため、削平を受けたものと考えられる。北側は自然面である。調査区の層序は先の地山標高の関係で、北側が7層、南側が3層に分別できる。全面に存在する現代土（層厚約0.1m）を除去すると、南側は灰オリブ色土（第3層、層厚0.2m）、地山（灰白色粘土）となる。北側はにぶい黄橙色粗砂（第2層、層厚0.2m）、灰オリブ色土（第4層、層厚0.2m）、オリブ黄色細砂（第5層、層厚0.15m）、明黄褐色礫土（第6層、層厚0.2m）、灰色粘土（第7層、層厚0.2m）、地山（灰白色礫）となる。

北側の堆積は、第6層が人為的な造成とみられるが、その後第5層が自然に流れ込んでいる。第4層に再度造成して、南側地山面のレベルに併せて嵩上げたようである。これら一連の流れは、数日間のことと推定できる。第2層は現状の植木埋土である。堆積状況からは、農地の高さの違いが段として存在したと考えられる。なお、第6層から、現代の平瓦が出土してる。

第7層については、ほぼ垂直に立ち上がる南肩部を検出しており、遺物包含層とするより、遺構の可能性はある。しかし、現状からは断定できないので、今後の課題としたい。（前川）

IV 秦廃寺

98-40区の調査

秦廃寺は貝塚市北部、大字「半田」に位置する白鳳期から中世にかけての寺院跡である。本遺跡は、本市と岸和田市とのほぼ境界を流れる津田川、その支流である小淵川左岸の段丘上に位置する。標高約26mを測る。平成8年度府営桜塚住宅改築工事に伴う大阪府教育委員会による発掘調査によって寺城南限とその南側に広がる7～8世紀の集落が確認されている。今回発掘調査を

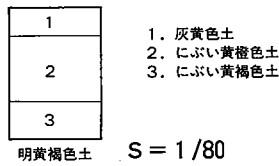
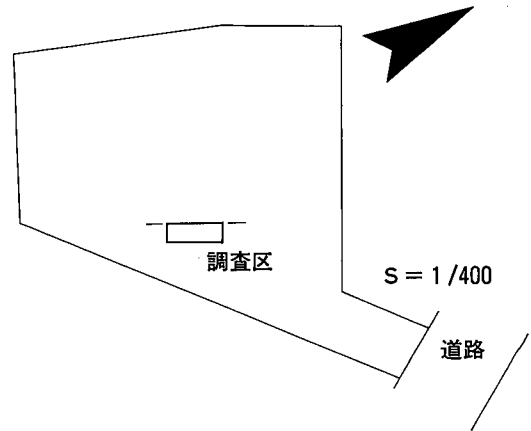
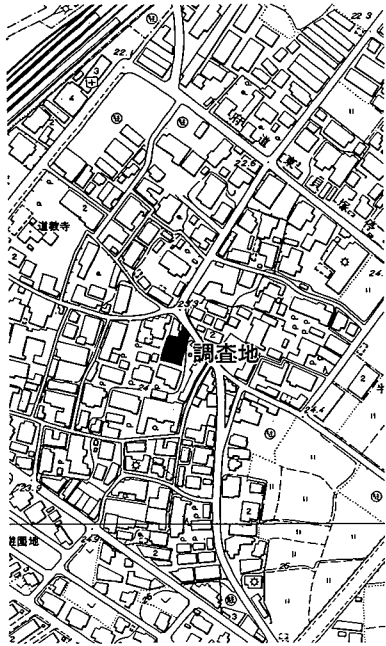


図15 98-40区

実施したのは貝塚市半田705-5である。

調査は申請建物の東側に1×3mの調査区を設定した。基本層序は現状地盤から1.4mまで盛土であり、土を締めてあった。盛土は大きく3層に分けられる。第1層は灰黄色土（厚さ約0.3m）、第2層はにぶい黄橙色土（厚さ約0.7m）、第3層はにぶい黄褐色土（厚さ0.4m）を測る。第4層は明黄褐色土の地山であった。遺物・遺構は認められなかった。（木嶋）

99-35区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市半田710-3である。調査は調査地東側に、南北方向、4.1×2.5

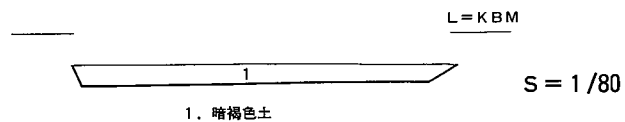
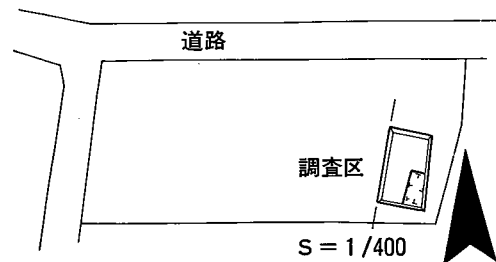
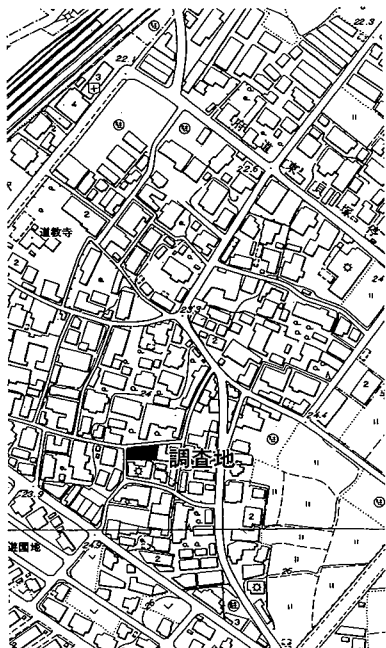


図16 99-35区

mの調査区を設定し実施した。調査区内には層厚約0.2mの暗褐色土層が堆積しており、その下は茶褐色砂礫土の地山であった。遺構はない。遺物は暗褐色土層中からガラス瓶、印判染付類、和泉音羽焼等が出土し、明治以降の堆積土層と考えられる。なお、若干ではあるが、瓦器細片も出土している。調査地はその状況から、削平を受けているものと考えられる。南西部にある府管住宅の調査でも同じ状況で、一帯が同様の状況であった可能性がある。(上野)

V 地藏堂廃寺

98-42区の調査

地藏堂廃寺は本市北西部、大字「地藏堂」に存在する平安時代から中世にかけての寺院跡である。泉佐野市との境界をなす見出川右岸の段丘上に位置し、周辺標高は22~24mを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市地藏堂246-9である。

調査は浄化槽部分について1×4.5mの調査区を設定した。基本層序は8層に分けられる。第1層は盛土で灰黄褐色土(厚さ0.12m)、第2層はカクランで灰色土(厚さ0.04~0.12m)、第3層はにぶい黄橙色粘質土と灰白色が混ざる(厚さ0.1m)〔No.4層よりも砂が多く混ざる〕、第4層はにぶい黄橙色粘土(厚さ0.2m)、第5層はにぶい黄橙色粘土と褐灰色粘土が混ざる(厚さ0.1m)、第6層は褐灰色粘土(厚さ0.1m)、第7層は黄灰色粘質土(厚さ0.08m)、第8層は明黄褐色粘土(地山)が堆積する。第5層は第4層と第6層とが混ざった層である。第3~7層は遺物包含層であり、時期は中世と考えられる。遺物は瓦質鉢、瓦質土器、土師質土器が出土した。

地山上面では土坑(SK-1)を検出した。検出長0.5m、幅0.3m、深さ0.23mを測る。埋土は褐灰色粘土と明黄褐色粘土であり、ブロック状に混ざる。遺物は瓦器碗片が出土した。この土坑は埋土がブロック状に堆積していることから、人為的に埋められたものと考えられる。埋没の時期は出土遺物から中世と考えられる。土坑の性格は不明である。また地山上面は、トレンチの中

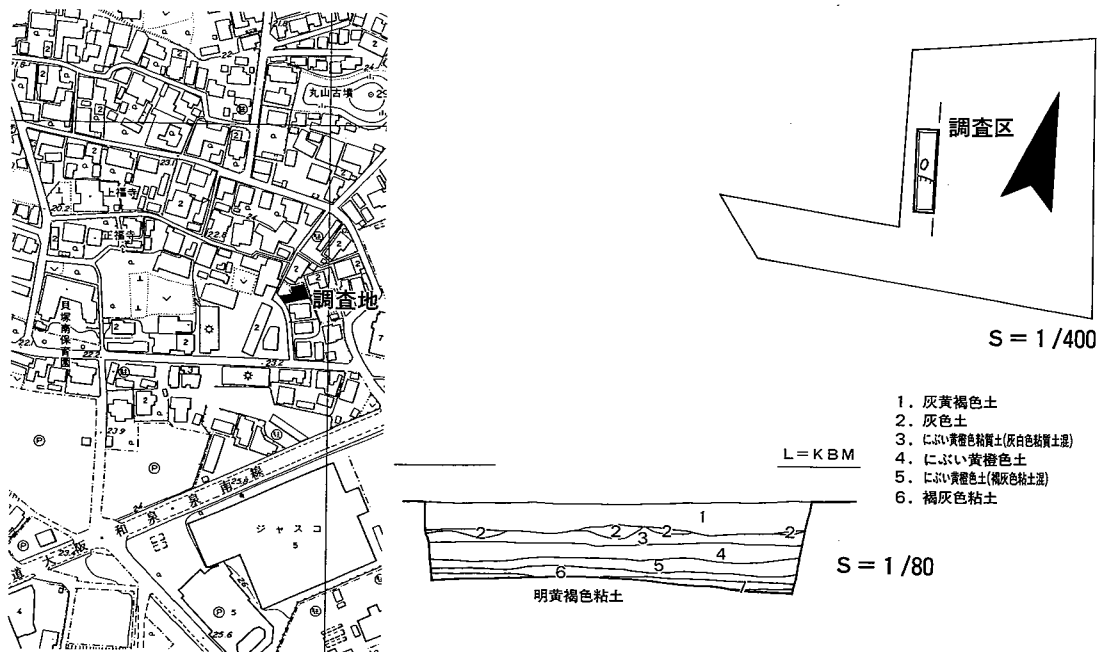


図17 98-42区

央部付近から南方向に緩やかに落ち込んでいく。基本層序では第7層にあたる。

調査地南方向に位置する道路の南側で以前調査が行われており、そこからも中世の包含層が確認されている。また調査地西方向に位置する南保育園でも調査を行っており、ここは谷状に落ち込んでいた。南保育園で確認した谷は西方向に開き、今回の調査地より手前で縮小していくと現段階では推測される。また北西方向に正福寺が位置する。今回の調査地から瓦は出土しなかったが、正福寺との関連性も考えていきたい。(木嶋)

99-6区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市地蔵堂261である。調査は調査地南側に、南北方向の2×4mの調査区を設定し実施した。

調査区内には5層の土層が堆積していた。上から順に盛土(第1層、層厚0.2~0.4m)、褐灰色土(第2層、層厚0.1m)、淡褐灰色土(第3層、層厚0.05~0.1m)、褐灰色砂礫混土(第4層、層厚0.1~0.15m)、黄灰色砂礫混土(第5層、層厚0.1m)である。地山は黄橙色砂礫で、現地表面より0.8mで検出した。

調査地南側の浄化槽部分は工事との関係で断面確認のみ行った。その結果、検出幅0.85m、深さ0.4mを測る溝状の遺構を確認した。溝状遺構は南に向かって落ち、東西方向にのびるものと考えられる。埋土は紫灰色粘土ブロック混黄褐色砂礫混土で人為的に埋められた痕跡を残している。北側は地山面にて遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

(上野)

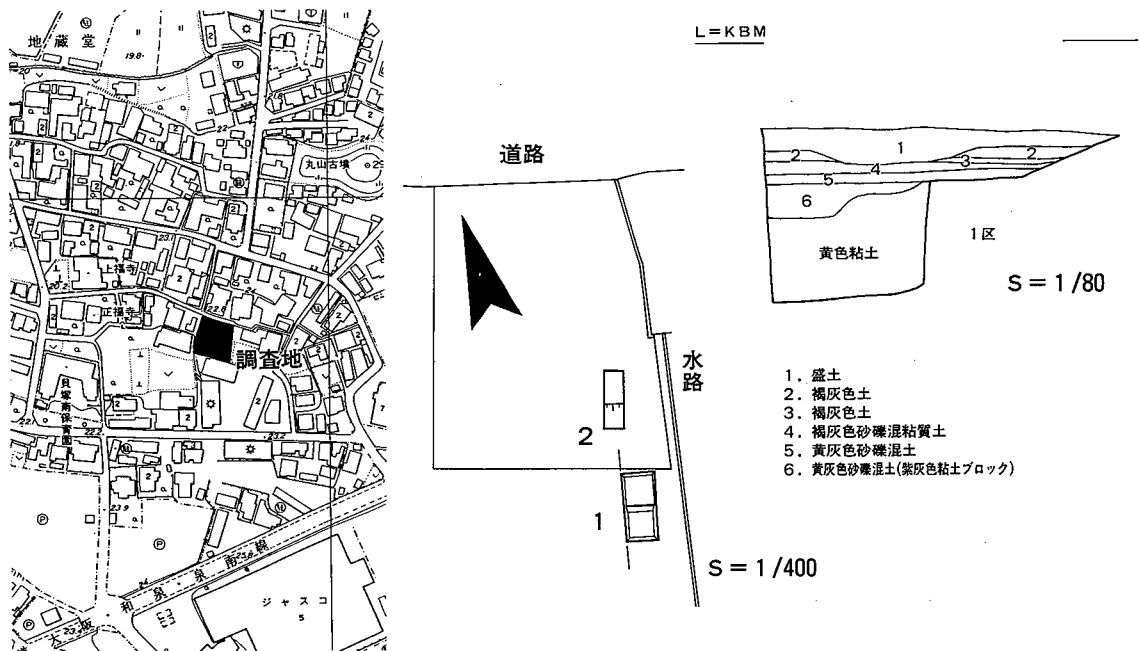


図18 99-6区

VI 名越遺跡

99-1区の調査

名越遺跡は本市内陸部、大字「名越」、「清見」、「麻生中」に存在する中世条里遺跡である。本

市を縦断する近木川右岸の中位段丘上に位置し、周辺標高は39~44mを測る。遺跡内の90%は農地であり、発掘調査は進んでいない。発掘調査を実施したのは貝塚市清見424-3である。

調査は浄化槽部分に2×3mの調査区を設定した。基本層序は16層に分けられる。第1層は現代耕作土(厚さ0.2m)、第2層はにぶい橙色粘土(厚さ0.06m){床土}、第3層は褐灰色粘質土(厚さ0.15m){マンガンを含む}、第4層はにぶい黄橙色粘土(厚さ0.1m){マンガンを若干含む}、第5層はにぶい黄橙色粘土(厚さ0.1m)、第6層は褐灰色粘土(厚さ0.1m)、第7層は褐灰色粘質土(厚さ0.35m)、第8層は褐灰色粘質土(厚さ0.1m)、第9層は黄灰色砂質土(厚さ0.08m)、第10層はにぶい黄橙色砂質土(厚さ0.1m)、第11層はにぶい黄橙色砂(厚さ0.15m)、第12層は灰白色砂(厚さ0.2m)、第13層はにぶい黄橙色砂に粘土が混ざる(厚さ0.06m)、第14層は黄灰色粘土(厚さ0.15m)、第15層は黄灰色粘土(厚さ0.08m)、第16層は灰色粘土(厚さ0.1m以上)が堆積していた。第3~7層は中世から近世にかけての耕作土であり、第7層から瓦器、土師器片が出土した。第11・12層は砂層、第14層以下は粘土層であり、耕作地化以前は谷であったと考えられる。遺物は出土しなかった。第14・15層に管状斑鉄がみられることから、砂層堆積以前は植物が茂っていたと考えられる。

(木嶋)

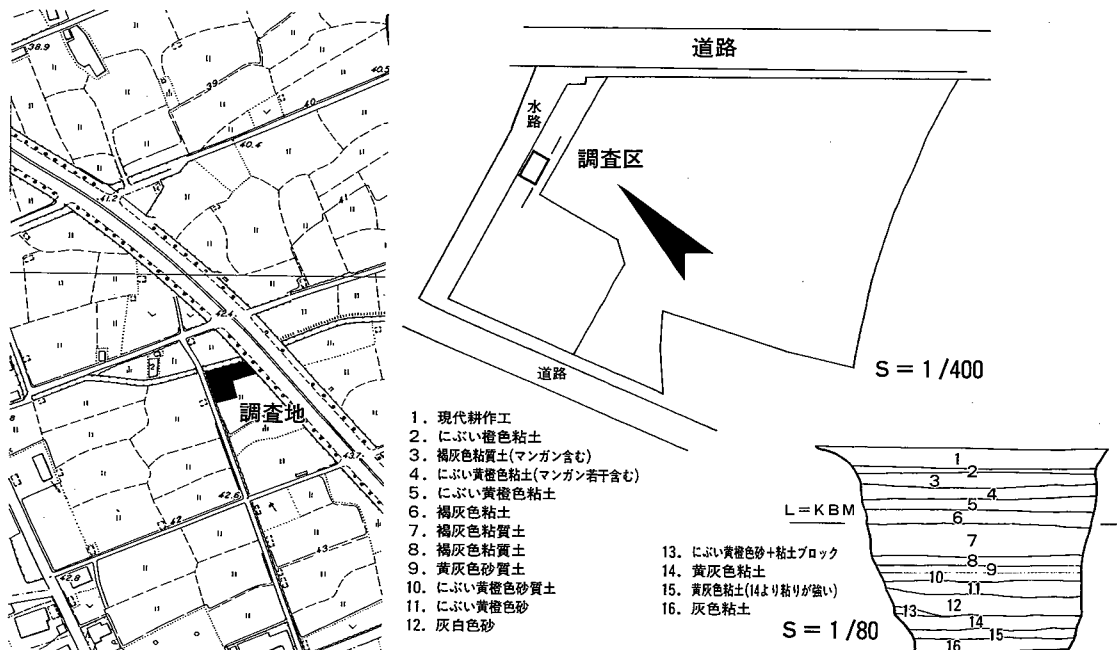


図19 99-1区

99-46区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市清見1036-2、1037の一部である。調査は調査地東側に、1×1mの調査区を設定し実施した。調査区内には3層の土層が堆積していた。上から順に盛土(第1層、層厚0.3m)、灰色砂礫混土(第2層、層厚0.45~0.65m)、にぶい黄橙色極細砂(第3層、層厚0.16~0.35m)である。第2層は解体残土をならしたような土で新しい時期のものである。第3層は調査範囲が狭いため、人為的なものか自然堆積かは不明である。地山は灰白色砂礫で、現地表面より1.1m下で検出した。遺構、遺物はなかった。

(上野)

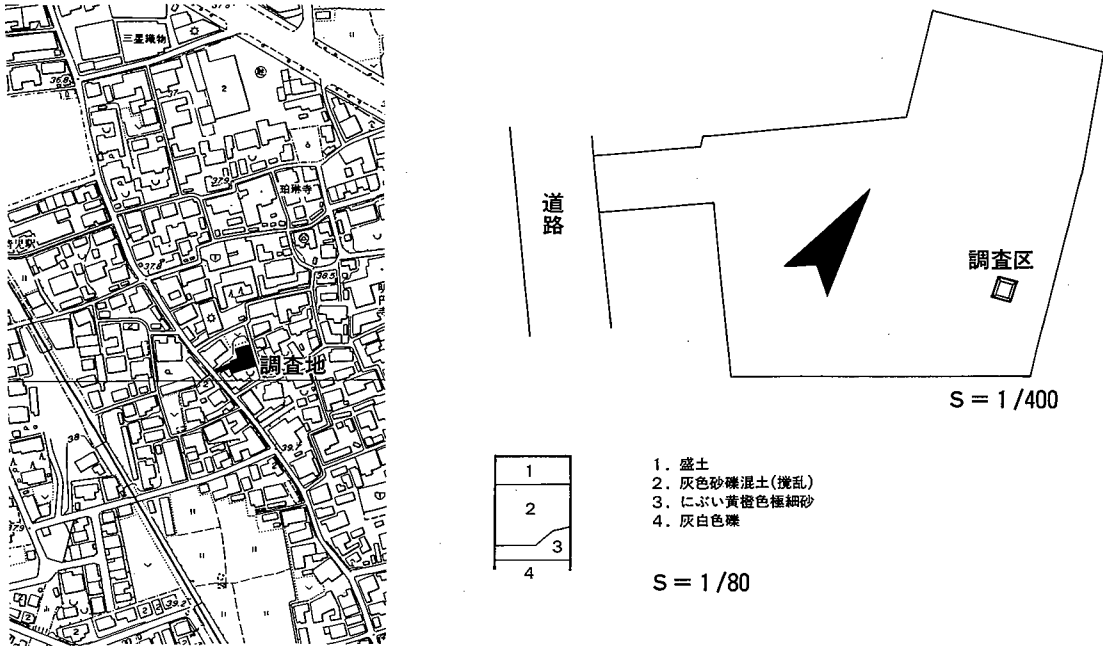


図20 99-46区

Ⅶ 半田遺跡

99-2区の調査

今回発掘調査を実施したのは、貝塚市北部、字半田、麻生中に存在する半田遺跡の一角である。本遺跡は、本市と岸和田市とのほぼ境界を流れる津田川、その支流である小淵川左岸の段丘上に位置する。周辺の標高16~18mを測る。本遺跡を縦断し熊野古道が通り、遺跡南西には古道に沿う一里塚が存在しており、古代末以降が本遺跡の時代の中心である。調査地は貝塚市半田743-1他である。周辺の遺跡としては、弥生~古墳時代は麻生中遺跡、新井ノ池遺跡、海岸寺山遺跡が

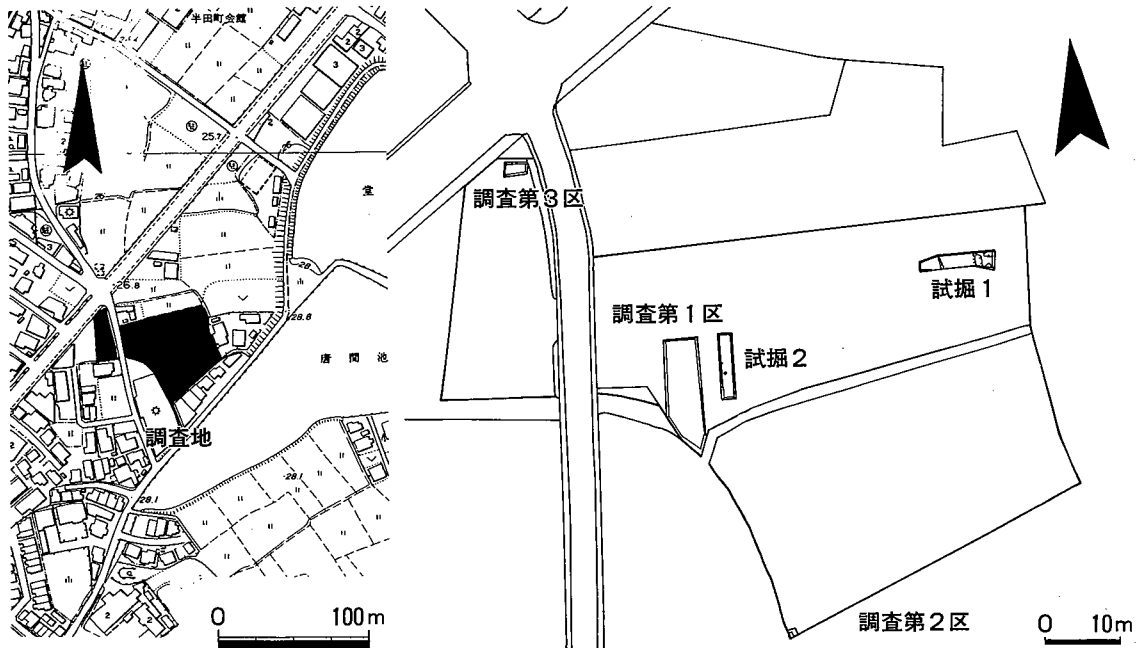


図21 99-2区

あり、新井ノ池遺跡より弥生土器、サヌカイト片が出土した。海岸寺山遺跡では須恵器窯跡が2基、古墳が5基確認されている。奈良～平安時代では秦廃寺、麻生中下代遺跡、清見遺跡があり、秦廃寺は7世紀後半に建立されたと推定されており、平成8年度の大阪府教育委員会の調査では寺の南限部分とみられる部分を検出している。前述の調査より秦廃寺・麻生中下代遺跡で竪穴住居、掘立柱建物が検出されており、秦寺創建以前の集落が指摘されている。中世の遺跡としては半田北遺跡、麻生中出口遺跡、麻生中遺跡、新井ノ池遺跡は熊野詣で有名な旧南海道（熊野街道）が通り、観音信仰で知られる水間寺へ至る水間街道との交差地にあたり、街道周辺の遺跡は集落跡の存在が推定されている。

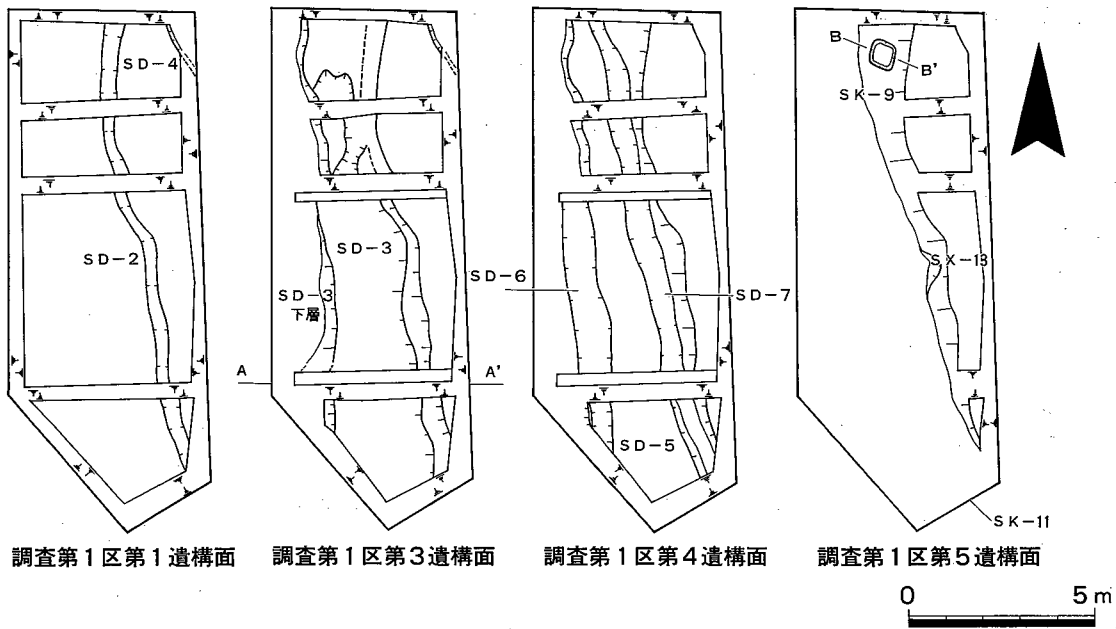
調査区は工事計画に基づき、調査第1区・浄化槽部分（60㎡）、調査第2区・申請地南側取付管部分（2㎡）、調査第3区・申請地北側取付管部分（4㎡）を設定し、行った。

以下、各調査区ごとに調査概要を記述する。

(1)調査第1区

基本層序 第1層は現代耕作土（層厚0.2m）、第2層はにぶい橙色砂質土（層厚0.05m）、第3層は黄灰色砂質土（層厚0.1m）、第4層はにぶい黄橙色シルトである。第3層より7世紀後半～9世紀の土師器、須恵器が出土した。調査区西側は谷状に落ち込み、流路、溝を検出した。

SD-2



調査第1区第1遺構面

調査第1区第3遺構面

調査第1区第4遺構面

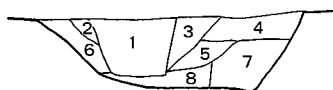
調査第1区第5遺構面

L = 26.400m

B'

B

SK-9 南面断面図



- 1. 褐灰色土10YR4/1 (若干小礫が混じる)
- 2. 灰黄褐色土10YR 5/2
- 3. 灰黄褐色土10YR 5/2
- 4. 褐灰色土10YR 5/1
- 5. 褐灰色砂質土7.5YR 4/1
- 6. 灰黄褐色砂質土10YR 4/2 (礫が混じる)
- 7. 灰黄褐色土10YR 5/2 (礫が混じる)
- 8. にぶい黄褐色土(シルト)10YR 5/3

図22 99-2区 平面図、断面図

本遺構は南東—北方向へのびる溝である。検出長12m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色砂質土である。第3層上面より掘り込まれ、遺物は土師器、須恵器が出土した(図24-20)。

SD-3

本遺構は調査区西側で検出した流路である。検出長12.5m、幅3.5m以上、深さ0.4mを測る。本遺構は3層に大別できる。上層は黄灰色砂礫土で5cm以上の石が混じる。中層は暗灰黄色砂礫で上層よりも石の量も多く、砂の粒子も粗くなる。下層は灰色砂礫である。調査区西側で1段下がり、上・中層よりも石の量が多くなる。断面形状は西へすり鉢状に下がっていくと考えられる。遺物は上・中層にかけて土師器、大量の須恵器が出土した。

SD-4

本遺構は調査区北東端で検出した溝の一部である。北壁断面で幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰黄色土である。本遺構は第3層堆積以前に掘られたもので、SD-2よりも古い。前回の試掘調査(試掘2)では本溝につながる遺構は検出されなかった。遺物は出土していない。

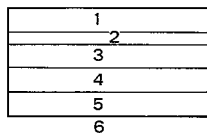
SD-5

本遺構は調査区西端で検出した溝である。検出幅約1.3m、深さ0.2mである。断面で検出した溝であり、平面でとらえることはできなかった。SD-6・7と重複し、本遺構の方が古い。

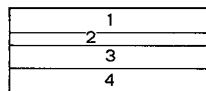
SD-6

本遺構は調査区西側より検出した溝である。検出長11m、幅0.5m、深さ約0.3mを測る。埋土は灰黄褐色シルで、北側では5cmほどの石が混じる。調査区のほぼ全域に及ぶSD-5が埋まった後に掘られた溝である。本遺構はSD-3によって上層が削り流されている。遺物は土師器、須恵器が出土した(図24-9)。

SD-7

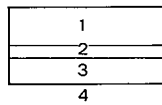


1. 現代耕作土(層厚約0.15m)
2. 灰褐色土7.5YR6/2(層厚約0.05m)
3. 黄灰色砂礫土2.5Y6/1(層厚約0.1m)
(SD-3上層)
4. 暗灰黄色砂礫土2.5Y5/2(層厚約0.15m)
(SD-3中層)
5. 灰色砂質土7.5Y5/1(層厚約0.15m)
(SD-3下層)
6. 明黄褐色礫10YR6/6(地山)



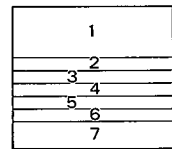
1. 現代耕作土(層厚約0.2m)(第1層)
2. にぶい黄色砂質土7.5Y6/4(層厚約0.05m)(第2層)
3. 黄灰色砂質土2.5Y6/1(層厚約0.1m)(第3層)
4. にぶい黄褐色シルト10YR6/4(地山)(第4層)

調査第1区東壁略図



1. 現代耕作土(層厚約0.2m)
2. にぶい黄色砂質土7.5Y6/4(層厚約0.05m)
3. 灰色砂礫5Y6/1(層厚約0.25m)
4. 黄灰色砂礫2.5Y6/1(地山)

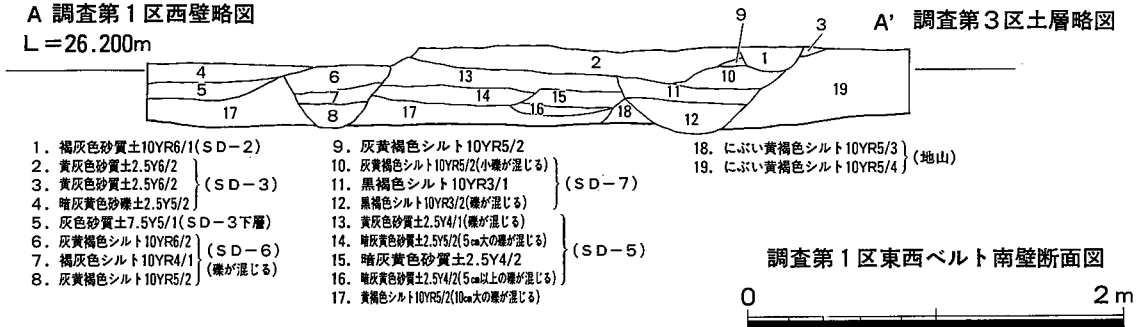
調査第2区土層略図



1. 盛土(層厚約0.5m)
2. 旧耕作土(層厚約0.05m)
3. 明黄褐色土10YR6/6(層厚約0.05m)
4. 褐灰色砂礫土10YR5/1(層厚約0.15m)
5. 灰黄褐色粘質土10YR5/2(層厚約0.1m)
6. 褐灰色粘質砂礫土10YR5/1(層厚約0.1m)
7. にぶい黄褐色砂礫土10YR5/4(地山)

A 調査第1区西壁略図
L=26.200m

A' 調査第3区土層略図



1. 褐灰色砂質土10YR6/1(SD-2)
2. 黄灰色砂質土2.5Y6/2
3. 黄灰色砂質土2.5Y6/2
4. 暗灰黄色砂礫土2.5Y5/2
5. 灰色砂質土7.5Y5/1(SD-3下層)
6. 灰黄褐色シルト10YR6/2
7. 褐灰色シルト10YR4/1
8. 灰黄褐色シルト10YR5/2

9. 灰黄褐色シルト10YR5/2
10. 灰黄褐色シルト10YR5/2(小礫が混じる)
11. 黒褐色シルト10YR3/1
12. 黒褐色シルト10YR3/2(礫が混じる)
13. 黄灰色砂質土2.5Y4/1(礫が混じる)
14. 暗灰黄色砂質土2.5Y5/2(5cm以上の礫が混じる)
15. 暗灰黄色砂質土2.5Y4/2
16. 暗灰黄色砂質土2.5Y4/2(5cm以上の礫が混じる)
17. 黄褐色シルト10YR5/2(10cm以上の礫が混じる)

18. にぶい黄褐色シルト10YR5/3
19. にぶい黄褐色シルト10YR5/4(地山)

調査第1区東西ベルト南壁断面図



図23 99-2区 断面略図、断面図

本遺構は南東—北西方向にのびる溝である。検出長12.5m、幅1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色シルトである。SD-5埋没後の水路である。本遺構はSD-3によって上層が削り流されている。遺物は土師器、須恵器が出土した(図24-1)。

SD-10

本遺構は西壁断面で検出した溝である。検出長約3m、深さ0.3mを測る。埋土は3層に大別できる。上層は褐灰色土、中層は褐灰色砂質土、下層は褐灰色粘質砂礫である。本遺構はSD-3よりも新しいものである。

SK-9

本遺構はSD-2掘削後に検出した柱穴である。一辺0.3m、深さ0.2mを測る。平面形状は隅丸方形である。埋土は灰黄褐色土である。断面観察より不明瞭ではあるが柱穴痕を検出した。遺物は土師器が出土した。

SK-11

本遺構は調査区南壁で検出した柱穴である。本遺構の上層は削平を受けるが、SD-3より掘り込まれている。さらに調査区中央部でもSD-7の東肩部が大きくえぐれる部分(SX-13)があり、これも柱穴であった可能性がある。SD-2よりも新しい時期のものと考えられる。

(2)調査第2区

基本層序 第1層は現代耕作土(層厚0.2m)、第2層はにぶい橙色砂質土(層厚0.06m)、第3層は灰色砂礫(層厚0.25m)である。土地は後世に削平を受けていた。

(3)調査第3区

基本層序 第1層は盛土(層厚0.5m)、第2層は現代耕作土(層厚0.05m)、第3層は明黄褐色土(層厚0.05m)、第4層は褐灰色砂礫土(層厚0.08~0.15m)、第5層は灰黄褐色粘質土(層厚0.1m)、第6層は褐灰色粘質砂礫土(層厚0.05~0.1m)、第7層は褐灰色土、第8層はにぶい黄褐色砂礫である。第4~6層は流路と考えられる。第1区より検出した流路・溝との関係は不明である。

(4)出土遺物

1はSD-7出土の須恵器坏身である。復元口径12.8cmで器高は低く、たちあがりは短く内傾する。2はSD-6出土の須恵器蓋である。復元口径15.6cmで端部は下方に屈曲する。

3~5はSD-5出土である。3は須恵器蓋である。復元口径16.4cmで天井部は若干丸みをおびる。4・5は須恵器坏身である。4は復元口径12.0cm、5は復元口径12.6cmでたちあがりは短く、内傾する。

6~8はSD-3下層出土である。6は須恵器坏身である。復元口径11.2cmでたちあがりは短く、内傾し、受部を折り曲げる。7・8は須恵器坏である。7は復元口径10cmで底部から口縁部にかけて若干丸みをおびつつ外反する。8は復元高台径10.4cmである。

9・10、21~23はSD-3中層出土である。9、21~23は須恵器蓋である。9は復元口径11.4cmで口縁部はかえりがつき、端部より下方へは張り出さない。10は須恵器坏である。復元口径11.2

cmで口縁部は若干外反する。

11~13、24・25はSD-3上層出土である。11は須恵器蓋である。復元口径11.2cmで口縁部はかえりがつき、口縁端部より下方へ張り出さない。12は須恵器坏である。復元口径11.2cmで全体的に丸みをおびる。13は須恵器坏である。復元口径15.0cmで口縁部は内弯しつつ、外方にのびる。24は須恵器蓋である。扁平な擬宝珠状つまみがつく。25は須恵器坏である。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味である。

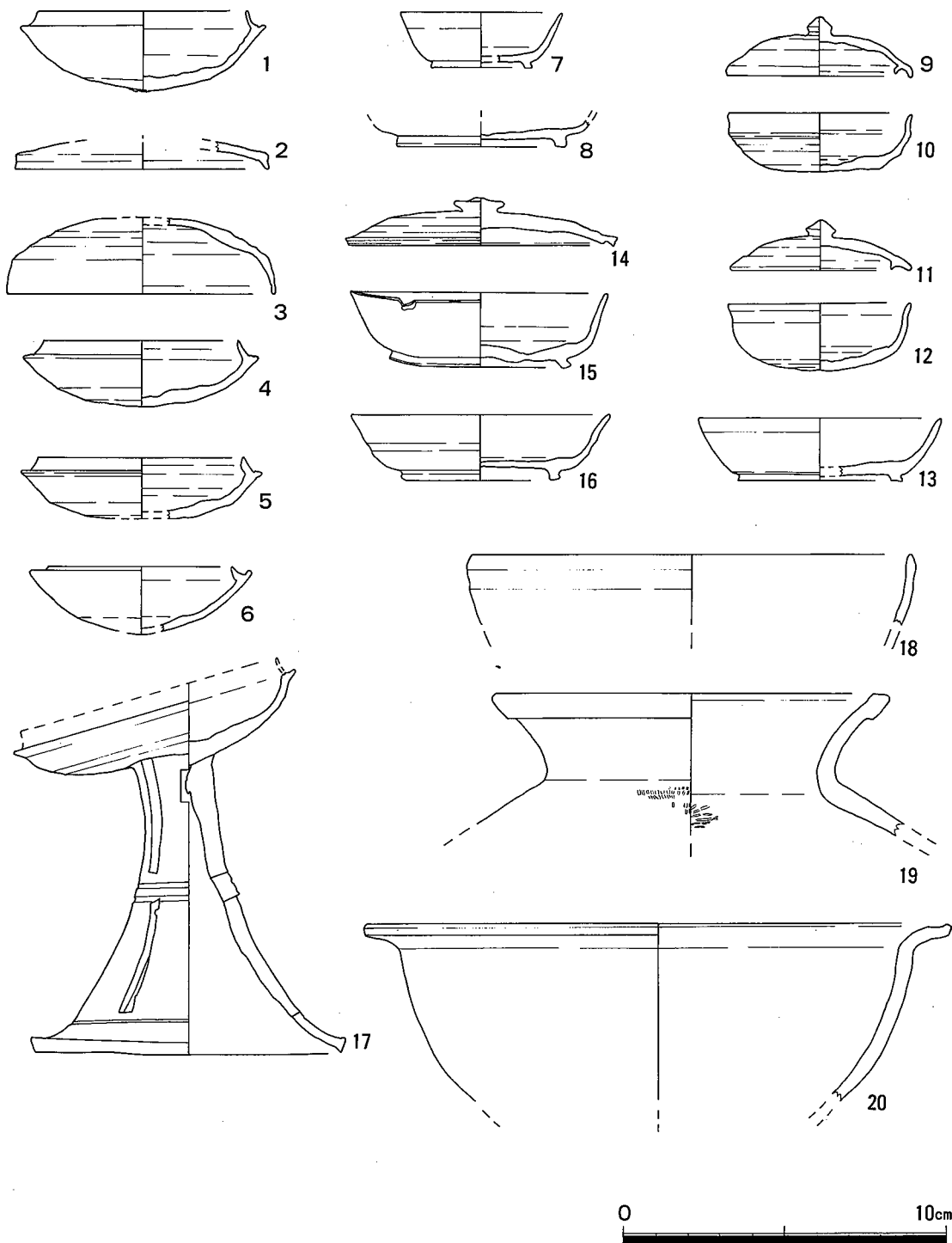


図24 99-2区 出土遺物

14～19、26～29はSD-3出土である。14は須恵器蓋である。復元口径16.4cmで口縁端部は下方に突出する。

15・16、29・28は須恵器坏である。15は口径15.8cm、16は復元口径16cmで口縁部は外方にのびる。28は全体的に丸みをおびる。口縁部はやや外反する。

17は須恵器有蓋高坏である。脚底部径19.0cm、坏部外径18.2cmで脚部はラッパ状に外反し、端部は下方に屈曲させる。3方向に長方形スカシを2段刻む。スカシの間に2条、脚底部にも1条の沈線がめぐる。坏部の器高は低く、扁平である。

18は須恵器鉢である。復元口径24.4cmで口縁部はゆるやかに内弯する。

19・26・27は須恵器甕である。復元口径24.8cmで口縁部は外反し、端部は肥厚する。26は頸部が直立気味。口縁部は内弯する。27は頸部が外反し、口縁部はやや肥厚する。

20はSD-2出土の土師器鍋である。復元口径36.4cmで口縁部は「く」の字状に屈曲する。30は第2層出土の須恵器坏である。

(5)まとめ

平成10年度に申請地の試掘調査を行っている。申請地東端（試掘1）と本調査区の西側（試掘2）の2ヶ所。試掘1の遺構は落ち込み、土坑を検出した。土坑は柱穴の可能性を考えたが、柱痕は確認できなかった。遺物は7世紀後半から8世紀の須恵器が出土した。試掘2でピットを検出したが、柱穴ではなかった。遺物は7世紀後半から8世紀の須恵器が出土した。

試掘2ではにぶい黄橙色シルトの安定した地山上面を検出したが、本調査区では地山上面を東側で検出したが、西側の地形は大きく下がっていた。

調査区西側は谷地形であり、自然流路となっていたと考えられる。自然流路埋没後、東側にSD-5が形成される。この溝は南東から北西方向に流れていたと考えられる。SD-7の西側に北方向にのびるSD-7がつくられる。このSD-7は調査区東西ベルト断面でSD-5の西側を削っており、SD-5が埋没後にSD-7がつくられた。SD-7は農業用水路と考えられる。その後、第3層にあたる黄灰色砂質土が堆積し、新たに用水路を設けていたと推測される。

第3層堆積後、埋没した谷に沿ってSD-3が形成される。砂礫を中心とする埋土であり、拳大の石が多量に含まれていた。また埋没したSD-7・10の上部を削り流している。この流路の上・中層より大量の須恵器、土師器が出土した。出土した約9割は須恵器であった。これらは断面の摩滅が少ないことから、SD-3上層堆積時には水流は緩やかもしくはほとんどなく、集落の人々が土器を投棄したものと考えられる。

SD-3埋没後、SD-2・4がつくられる。このSD-2はSD-7とほぼ同位置に設けられており、土地を区画する目的もあったと推測される。SD-4は試掘2調査時に検出していないことから、ほぼまっすぐにのびていくものと考えられる。

地山上面でSK-9を検出した。しかし、調査区の南壁でも柱穴断面を検出し、その位置がSD-2と重複していた。柱穴の方が新しいことから、SK-9もSD-2よりも新しいと判断される。またもう1ヶ所柱穴ではなかったかと思われる部分もあったが、他の遺構と共にあやまっ

て掘削したと考えられる。これらの柱穴はそれぞれ距離があることから対応する可能性は少ない。

本調査区の西に半田遺跡の西側には奈良～平安時代の遺跡、秦廃寺跡がある。平成8年度の大阪府教育委員会の調査では7世紀前半～中葉（秦寺創建前）の竪穴住居跡9棟、7世紀後半～8世紀前半（創建後）の掘立柱建物11棟以上が検出されている。本市の平成10年度調査では8世紀の柱穴が検出されている。

調査範囲が限られているため、現段階で考えられることは、7世紀から8世紀前半までは秦寺の南に集落が形成されていた。しかし8世紀前半以降の建物は検出されていない。8世紀前半以降、集落は寺の東側に移っていくようである。本調査区の溝、流路より7世紀から8世紀後半の遺物が出土していることから、集落は途絶えることなく営まれていたと推測される。8世紀後半の建物の痕跡は検出されていないが、本調査区より柱穴を検出し、その埋土から9世紀中頃の土師器鍋が出土した。集落がどのように形成されていたかは不明であるが、9世紀中頃までは集落が継続されていたことがわかる。 (木嶋)

Ⅷ 沢共同墓地遺跡

99-4区の調査

沢共同墓地遺跡は本市北西部、大字「沢」の存在する中世墓地である。近木川左岸の段丘上から砂堆部に位置し、周辺標高は3.8～6.8mを測る。現在も墓地は砂堆部に存在するものの、段丘上の状況は明確ではない。発掘調査を実施したのは貝塚市沢897-1である。

調査は調査地東端に、南北方向の2×5.5mの調査区を設定し実施した。調査区内には3層の土層が堆積していた。上から順に盛土（第1層、層厚0.7m）、暗青灰色土（第2層、層厚0.1m）、青灰色砂質土（第3層、層厚0.1m）である。第2、3層は現代耕土層である。地山は黄色粘土で、現地表面より0.9～1mで検出した。地山面では土坑2基を検出した。SK-1は幅1.5m、検出長

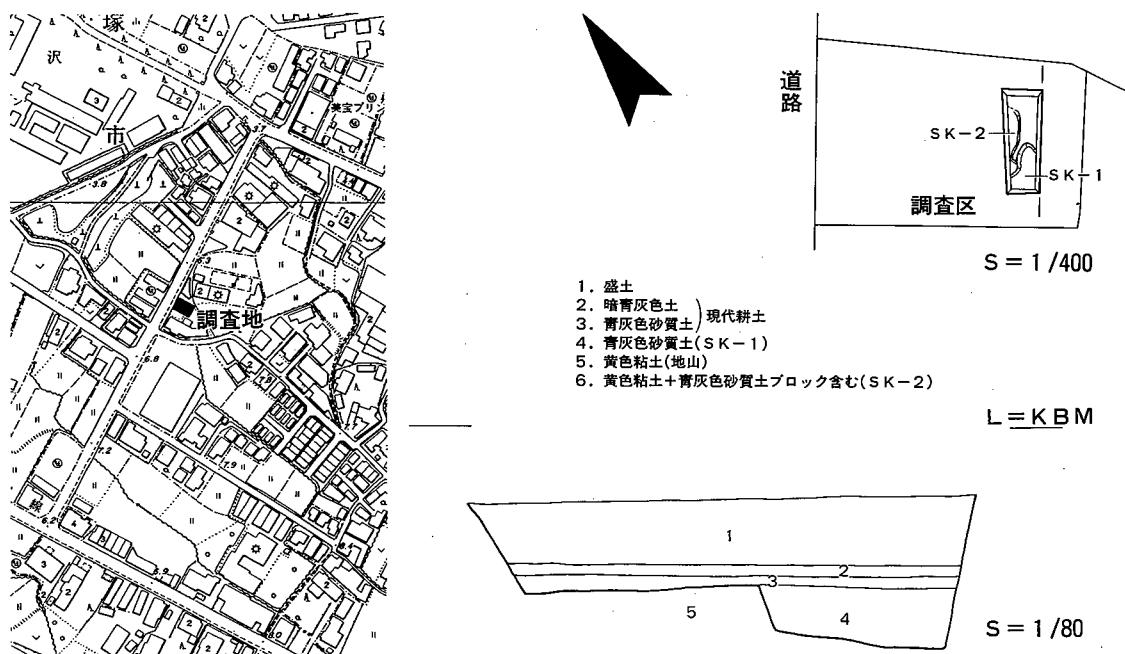


図25 99-4区

2.5mで、深さは0.45～0.6mを測る。SK-2は検出幅0.5m、検出長3.5mで、深さは0.03～0.05mを測る。遺物はSK-1より幕末頃の丹波焼甕、和泉音羽焼土瓶が出土した。周囲の調査例からいずれも粘土採掘坑と考えられる。

調査区周囲では道路面と農地は同じ高さである。しかし調査区の現代耕土層上面は周囲より一段低くなり、地山面は更に低くなる。地山面は人為的に削られた様相を呈しており、農地1反を粘土採掘に利用したものと思われる。(上野)

X 石才遺跡

99-7区の調査

石才遺跡は本市内陸部、大字「石才」に存在する中世遺跡である。近木川右岸の中位段丘上に位置し、周辺標高21～23mを測る。遺跡範囲のほぼ中央における発掘調査によって中世集落の一部を確認したが、それ以外は不明である。発掘調査を実施したのは貝塚市石才574である。

調査は調査地北側に、東西方向の1.5×10mの調査区を設定し実施した。調査区内には層厚0.3～0.4mを測る盛土の直下に2層の土層が堆積していた。上から順に褐灰色及び黄褐色砂礫混土(第2層、層厚0.15～0.2m)、黄褐色砂礫混粘質土(第3層、層厚0.1～0.2m)である。地山は黄褐色砂礫で、現地表面より0.8mで検出した。地山面は西側で高くなる。第2層は堆積の状況等から近世の整地土と考えられる。第3層は西側端では存在しない。地山面では上からの掘り込みである近世～近代の土坑以外は遺構はなかった。遺物は第3層より土師器細片が出土した。(上野)

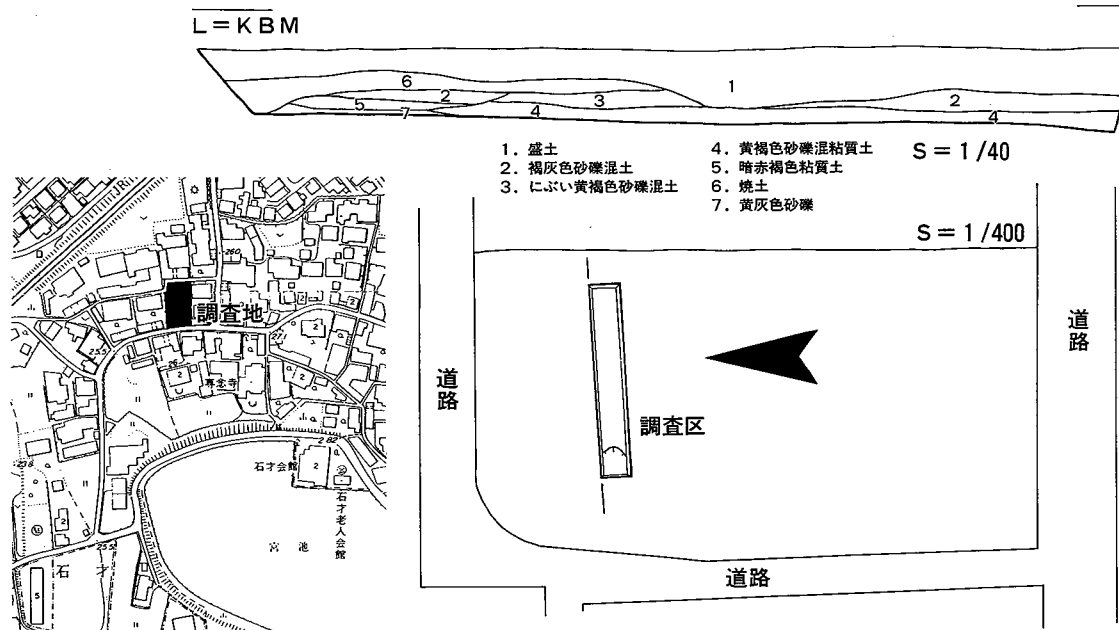


図26 99-7区

X 土生遺跡

99-11区の調査

土生遺跡は本市北部、大字「久保」に存在し、岸和田市と貝塚市に跨る弥生～古墳時代の集落跡である。遺跡名称は岸和田市側の地名「土生」をつけている。津田川左岸の段丘上に位置し、

周辺標高15~19mを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市久保245-4である。

工事計画に基づき、浄化槽部分（トレンチ1、1×3m）と南側申請建築物部分（トレンチ2、1×5m）に調査区を設定した。

トレンチ1 基本層序は第1層は盛土（厚さ0.3m）、第2層はオリブ灰色砂礫（厚さ0.2m）、第3層は灰色粘質シルト（厚さ0.2m）、第4層は灰色砂（厚さ0.2m）、第5層は灰色砂（厚さ0.2m）、

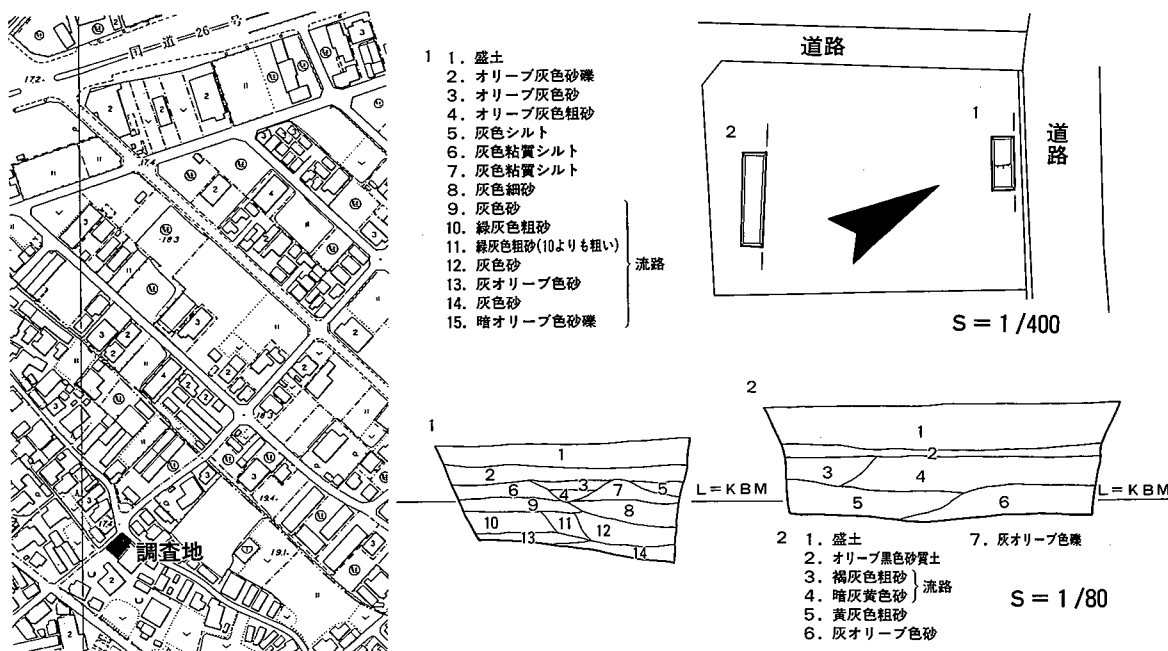


図27 99-11区

第6層は灰色砂（厚さ0.1m）、第7層は暗オリブ色砂礫（地山）である。

トレンチ2 基本層序は第1層は盛土（厚さ0.5m）、第2層はオリブ黒色砂質土（厚さ0.1m）、第3層は暗灰黄色砂（厚さ0.4m）、第4層は灰オリブ色砂（厚さ0.3m）、第5層は灰オリブ礫（地山）である。

第1トレンチは第3層より下層が自然流路堆積と考えられる。自然流路の肩部は検出できなかった。北西から南東に向かって深くなる。遺物は出土しなかった。時期は不明である。第3層は耕作土と考えられる。第3層上面よりSX-1、SX-2を検出した。SX-1は検出幅0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は第2層に類似する。SX-2は検出幅0.5m以上、深さ0.2m以上を測る。埋土は灰色シルトである。両遺構とも遺物は出土しなかった。第2トレンチは第3層より下層が自然流路である。自然流路の肩部は検出できなかった。埋土は東から西に砂粒が粗くなる。第3・4層より弥生時代Ⅲ様式から古墳時代の土器、サヌカイトが多数出土した。第1・2トレンチで検出した自然流路は埋土の状況で判断すると対応しない。（木嶋）

XI 新井ノ池遺跡

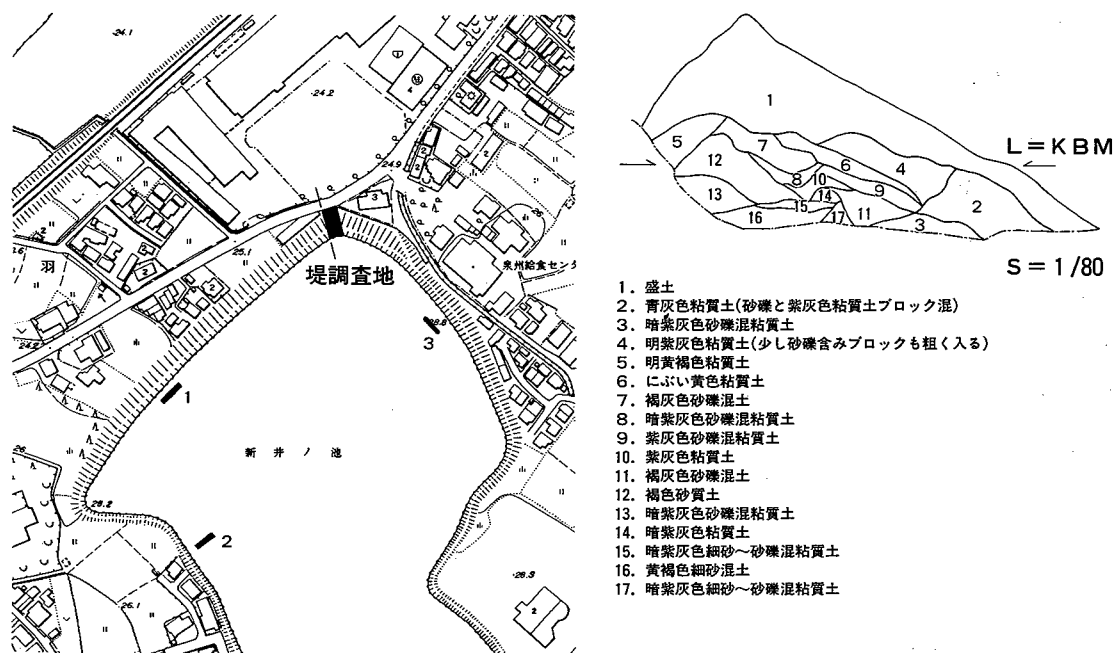
99-14区の調査

新井ノ池遺跡は本市北部、大字「半田」「新井」「麻生中」に存在する弥生時代~中世にかけての集落跡他である。中位段丘上に存在し、周辺標高15~18mを測る。発掘調査を実施したのは貝

塚市半田1-2他である。

調査地内3カ所に調査区を設定して実施した。

第1区 北部に設定した3×7.5mの調査区である。現地表面から1.4mにかけて、池内堆積のシルト、細砂の混合層が存在し、その下には、青灰色、暗灰色粘土が存在する（層厚約1.1m）。その下に地山となる青灰色礫が存在する。遺構等は存在しない。



1. 盛土
2. 青灰色粘質土(砂礫と紫灰色粘質土ブロック混)
3. 暗紫灰色砂礫混粘質土
4. 明紫灰色粘質土(少し砂礫含みブロックも粗く入る)
5. 明黄褐色粘質土
6. にぶい黄色粘質土
7. 褐灰色砂礫混土
8. 暗紫灰色砂礫混粘質土
9. 紫灰色砂礫混粘質土
10. 紫灰色粘質土
11. 褐灰色砂礫混土
12. 褐色砂質土
13. 暗紫灰色砂礫混粘質土
14. 暗紫灰色粘質土
15. 暗紫灰色細砂～砂礫混粘質土
16. 黄褐色細砂混土
17. 暗紫灰色細砂～砂礫混粘質土

図28 99-14区

第2区 西部に設定した2×7mの調査区である。現地表面から0.2～1.2mにかけて、池内堆積のシルト、細砂の混合層が存在し、その下には、青灰色粘土が存在する（層厚約0.2m）。その下に地山となる淡灰黄色礫が存在する。地山面は西から東にかけて高くなり、その後東に向って緩やかに低くなる。本地点付近が旧谷地形のかた部分に相当する。遺構等は存在しない。

第3区 東部に設定した3×11mの調査区である。現地表面から1.1mにかけて、池内堆積のシルト、細砂の混合層が存在し、その下には、青灰色粘土が存在する（層厚約0.2m）。その下に地山となる淡灰黄色礫が存在する。遺構等は存在しない。 (前川)

調査は池の北西部、堤横断部の断面を確認した。

調査区内には17層の土層が堆積していた。上から順に第1層：盛土、第2層：暗青灰色粘質土、第3層：暗紫灰色砂礫混粘質土、第4層：明紫灰色粘質土、第5層：明黄褐色粘質土、第6層：にぶい黄色粘質土、第7層：褐灰色砂礫混土、第8層：暗紫灰色砂礫混粘質土、第9層：紫灰色砂礫混粘質土、第10層：紫灰色粘質土、第11層：褐灰色砂礫混土、第12層：褐色砂質土、第13層：暗紫灰色細砂礫混粘質土、第14層：暗紫灰色粘質土、第15層：暗紫灰色細砂～砂礫混粘質土、第16層：黄褐色細砂混土、第17層：暗紫灰色細砂～砂礫混粘質土である。第2層と第3層は固くてしっかりしているので、元来の堤であった可能性は高い。後世になって、さらに南側に包含層を含む7～17層を盛り上げ、5・6層や4層を補填した後、第1層を盛って現在の堤部としている。断

面の観察により、本堤は第3層→第2層→第14・15・16・17層→第13・12層→第11・10・9層→第8・7層→第5・6層→第4層→第1層の順で堆積している。工事の関係等により地山は確認できていない。遺物は第3層より土師器細片、第4層よりサヌカイト石核が出土した。第4層は地山粘質土をベースとし、若干砂礫、ブロック等が混じっている層で、石核は他の遺跡から運ばれてきたものである。(上野)

XI 脇浜遺跡

99-16区の調査

脇浜遺跡は貝塚市西部、大字「脇浜」に存在する。近木川右岸の砂堆部～段丘上に位置し、周辺標高は2～10mを測る。都市計画道路貝塚中央線建設に伴う発掘調査によって縄文時代、古墳時代の遺物が多量に出土している。発掘調査を実施したのは貝塚市脇浜3-436-1である。調査は工事計画に基づき調査地南部に1×3mの調査区を設定し実施した。

基本層序は第1層は盛土(厚さ0.3～0.35m)、第2層は灰黄褐色砂・石混じる(厚さ0.1m)、第3層は灰黄褐色砂(厚さ0.3m)、第4層は暗灰黄色砂質土、灰黄色粘土ブロックが斑点状に混じる(厚さ0.08m)第5層は灰黄褐色砂質土(0.2m)、第6層はにぶい黄褐色砂(厚さ0.1m)、第7層はにぶい黄褐色砂(地山)である。第2・3・4層はカクランである。第5・6層は遺物包含層であり、近世の瓦、土錘、土器、染付磁器等が出土した。遺構は確認できなかった。(木嶋)

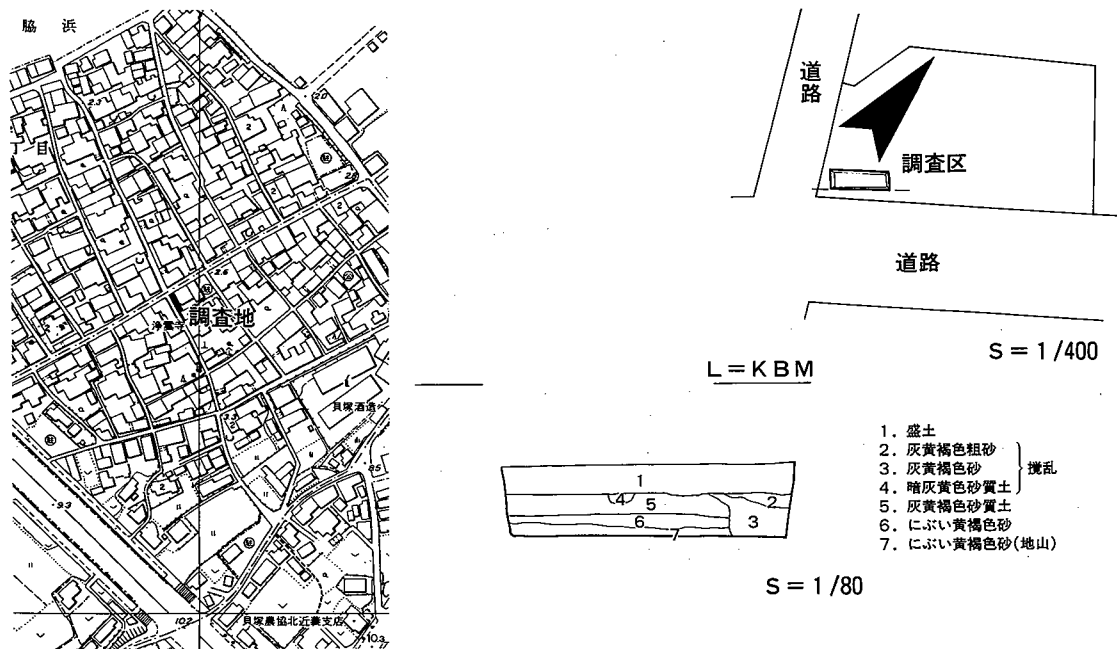


図29 99-16区

99-21区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市脇浜2-579-3である。調査は工事計画に基づき、調査地北部に2×4.5mの調査区を設定した。

基本層序は第1層：盛土(厚さ0.6m)、第2層：灰色砂質土+明赤褐色(厚さ0.06m)、第3層：黄灰色土+浅黄色が混じる(厚さ0.1m)、第4層：灰オリーブ色粘質土、第3層と第5層の混じ

り（厚さ0.06m）、第5層：黄灰色粘土砂が多く混じる（厚さ0.2m）、第6層：黄灰色粘土、上層に比べると砂の量が少なく、粘質もつよい（厚さ0.1～0.15m）、第7層：褐灰色粘土、第6・7層に比べて砂の量がかかなり少なくなり、粘質もよりつよくなる（厚さ0.1m）、第8層：黄灰色粗砂+明黄褐色混じる（厚さ0.1m）、第9層：黒褐色粘土に砂が多量に混じる（厚さ0.06m）、第10層：

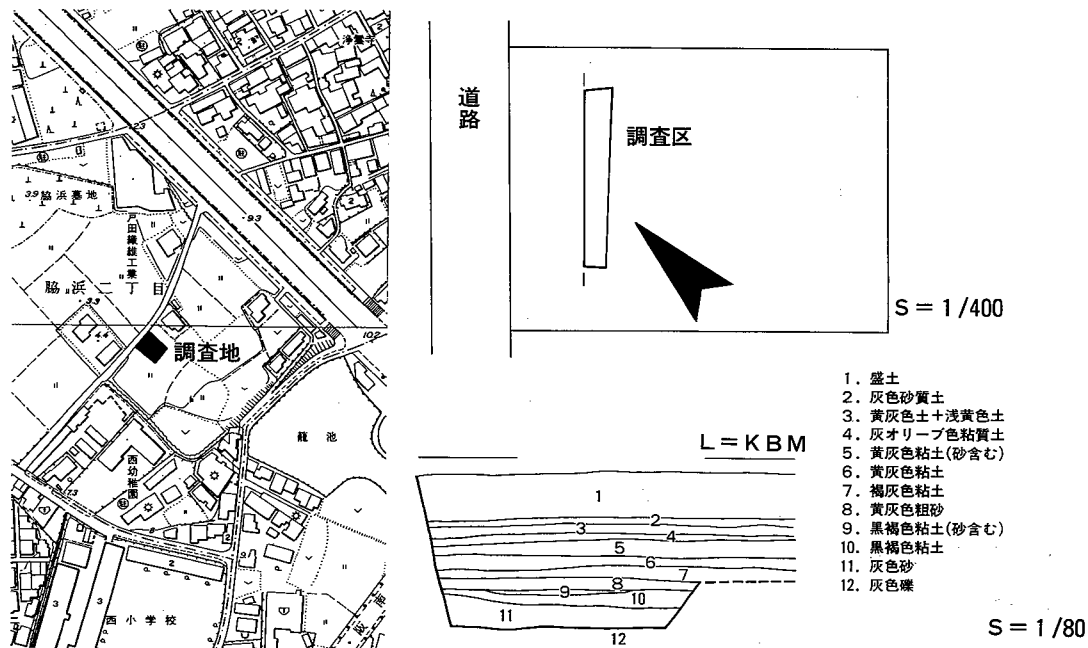


図30 99-21区

黒褐色粘土（厚さ0.1～0.2m）、第11層：灰色砂（厚さ0.2m）、第12層：灰色礫が堆積する。第1層と第2層の間でわずかであるが、耕作土が残っていた。申請地北側の水田の高さとほぼ同じであることから、耕作土を削った後に盛土を行っていた。第2～4層は中・近世の耕作土である。溝と考えられる遺構を断面で検出した。第7層以下は粘土であり、第5・6層より中世の遺物が出土した。申請地は谷地形であったと考えられる。（木嶋）

XII 清児遺跡

99-17区の調査

清児遺跡は本市内陸部、大字「清児」、「麻生中」に存在する。近木川右岸の段丘上に位置し、周辺標高は30～39mを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市麻生中614-1である。調査は工事計画に基づき、污水・雑排水管・桝設置部分に対して1×13mの調査区を設定した。

基本層序は第1層は現代耕作土（厚さ0.2～0.25m）、第2層はにぶい黄橙色土・床土（厚さ0.1m）、第3層はにぶい黄色砂質土（厚さ0.1m）、第4層は黄灰色礫・拳大より小さい石（厚さ0.1×～0.3m）第5層は1明黄褐色粘土（地山）が堆積する。調査区西から東方向に地形が落ち込んでいる。第4層は礫層であり、自然流路と考えられる。調査区西側は床土の下層は地山であり、土地の削平が行われている。遺物・遺構は確認できなかった。（木嶋）

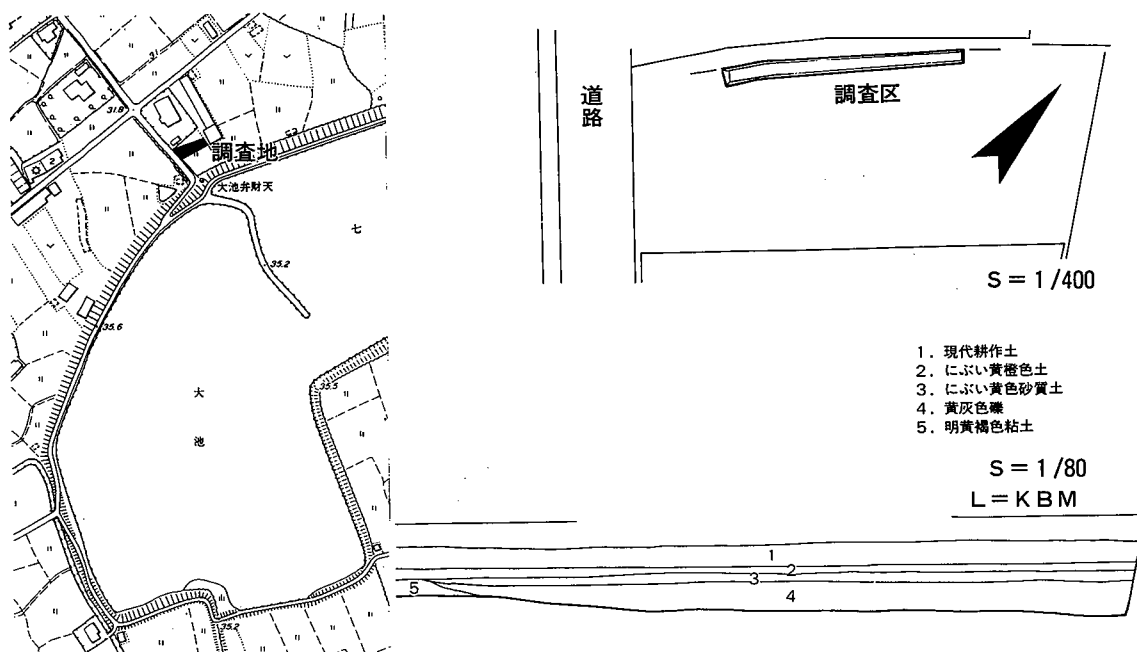


図31 99-17区

XV 加治・神前・畠中遺跡

99-25区の調査

加治・神前・畠中遺跡は本市中央部をほぼ縦断して流れる近木川右岸の段丘上、標高11~20mを測る地点に位置する。大字「加神」「畠中」「石才」に所在し、遺跡内には市役所庁舎を始め公共施設が集中しており、これら建設に伴う発掘調査を多く実施しており、市内では最も纏まった調査成果が得られている。遺跡範囲は東西1.3km、南北1.5kmを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市畠中2-325-1である。調査地東部に1×4mの調査区を設定した。

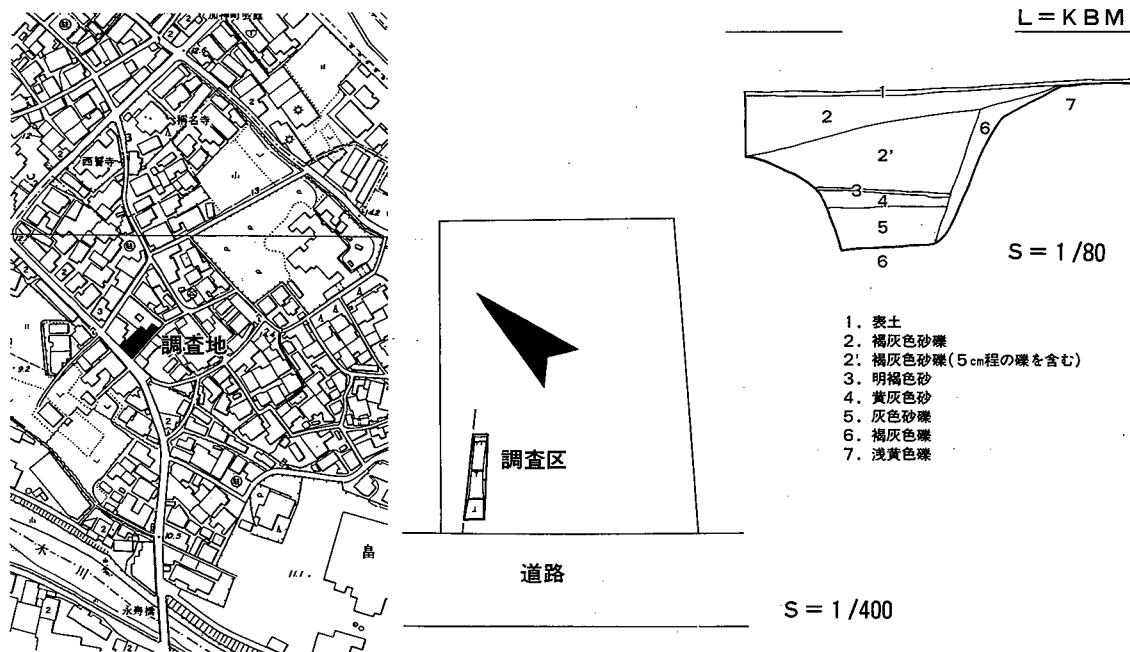


図32 99-25区

基本層序は第1層は表土(厚さ0.05m)、第2層は褐灰色砂礫、4~5cmの礫が混じる(厚さ1m)、第3層は明褐色砂(厚さ0.04m)、第4層は黄灰色砂(厚さ0.1~0.2m)、第5層は灰色砂礫(厚さ0.4m)、第6層は褐灰色礫(地山)、第7層は浅黄色礫(地山)である。

申請地は石垣を行っており、前面道路との差は約1mあり、申請地南側は盛土の可能性があった。盛土はなく、第2層から第5層までは砂礫・砂の堆積であり、自然流路と考えられる。土地が砂礫層のため石垣で補強を行っていた。調査地北側は表土を除去すると地山であった。南方向には近木川が流れており、検出した砂礫・砂堆積はこの川の旧流路と考えられる。遺物・遺構は確認できず、時期は不明である。(木嶋)

99-50区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市島中301である。調査は調査地東側と南側に調査区を設定して実施した。調査区は南北方向1.7×3m、東西方向1.4×2.5mで、それぞれ第1区、第2区とした。

第1区には3層の土層が堆積していた。上から順に盛土(第1層、層厚0.6~0.7m)、青灰色粘質土(第2層、層厚0.05~0.16m)、褐灰色粘質土(第3層、層厚0.2~0.3m)である。第2区には2層の土層が堆積していた。上から順に盛土(第1層、層厚0.3m)、砂礫、コークス、煉瓦片等を含む灰色土(第2層、層厚0.4~0.6m)である。地山は1・2区とも褐灰色砂礫で、近木川の氾濫層と考えられる。現地表面より0.7~0.9mで検出した。

調査区には中世の層は堆積しない。第2区では近代層が直接地山直上に堆積する。また、第1区、第3層にはラミナ層や上面に乾痕が多数認められ、削った際の感触や土の締まり方などからみて、耕作土等ではない。状況から自然堆積層であった可能性がある。以上のことから調査区では近木川の氾濫等により、近代まで活発な開発はなかったものと思われる。ちなみに前建物は施主の話によると、大正12年建築だったらしい。遺構、遺物は無かった。(上野)

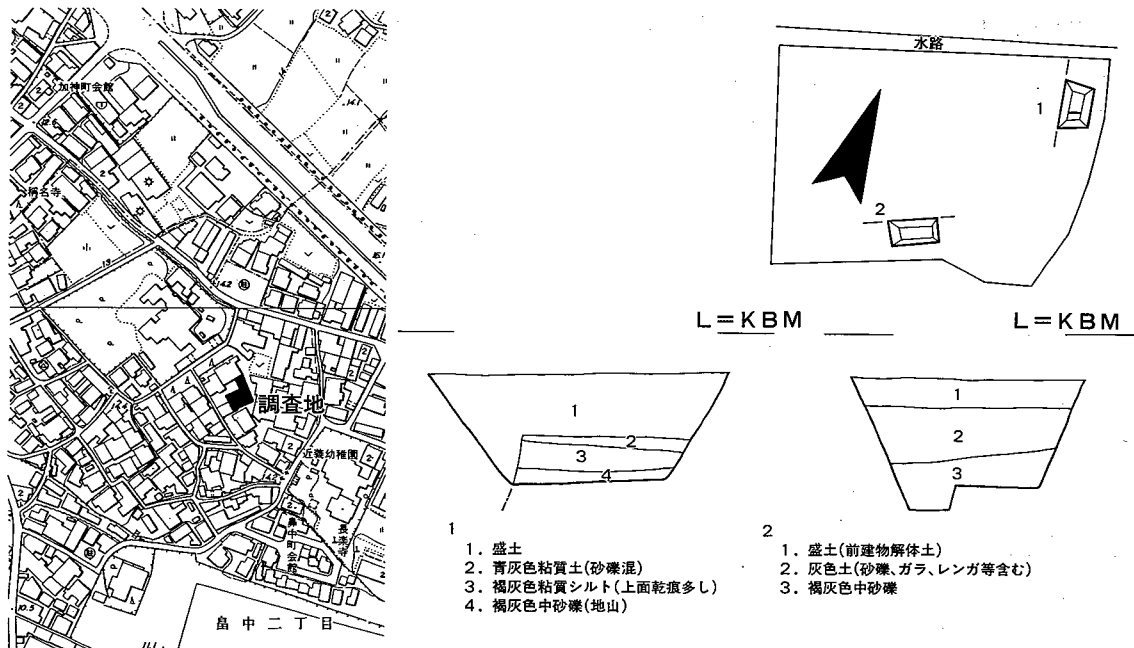


図33 99-50区

99-56区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市加神2-145、146、147である。調査は工事計画に基づき、申請建物外に調査区を設定した。以下、調査区ごとに記す。

トレンチ1

第1層は灰黄色土(厚さ0.2m)・盛土、第2層はにぶい黄橙色粘土(厚さ0.04m)、第3層は褐灰色粘土(厚さ0.1m)、第4層は灰黄褐色土(厚さ0.2m)、第5層は灰黄褐色土(厚さ0.1~0.6m)、

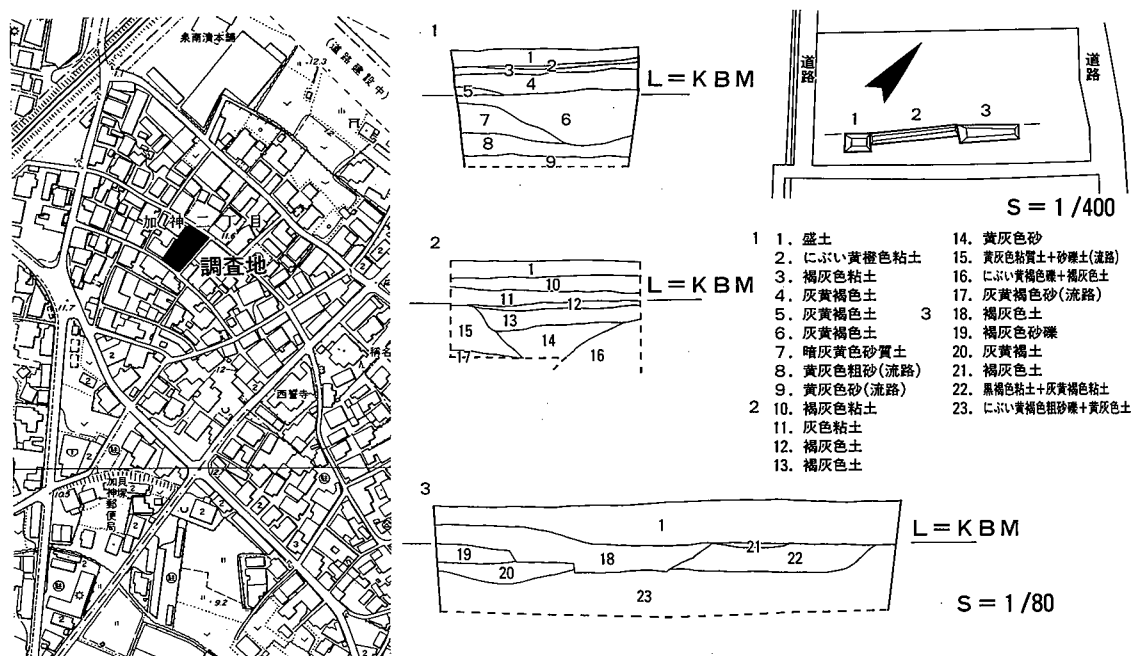


図34 99-56区

第6層は暗灰黄色砂質土(厚さ0.3m)、第7層は黄灰色粗砂(厚さ0.25m)、第8層は黄灰色砂(厚さ0.1m以上)である。第4層とトレンチ2:第2層は近代の攪乱土であり、多数の瓦、陶磁器が出土した。瓦などを投棄したものと考えられる。第6・7層とトレンチ2第3・4層は近世の遺物包含層と考えられ、近代攪乱層に比べると出土量は少ない。

トレンチ2

第1層は灰黄色土(厚さ0.2~0.5mトレンチ1の第1層)、第2層は褐灰色土(厚さ0.2~0.3m)、第3層は褐灰色砂礫(厚さ0.2m)、第4層は灰黄褐色土(厚さ0.2m)、第5層はにぶい黄褐色粗砂レキに黄灰色土が混じる(厚さ0.5m以上)地山である。溝状遺構と考えられる黒褐色粘土+灰黄褐色粘土の混じりの堆積を検出した。遺物は土師器微細片が観察できる程度である。時期は中世末~近世である。(木嶋)

XV 森下代遺跡

99-37区の調査

森下代遺跡は貝塚市のほぼ中央部、大字「森」に所在し、近木川右岸の段丘上に位置する。現状標高53mを測る。遺跡範囲は東西270m、南北400mを測る。遺跡内の多くが市街化調整区域であるため農地が多く残り、調査例は少ない。発掘調査を実施したのは貝塚市森435-1である。

調査は調査地北側に、東西方向の約1×1.5mの調査区を設定し実施した。調査区内には5層の土層が堆積していた。上から順に盛土（第1層、層厚0.1～0.2m）、褐灰色砂質土（第2層、層厚0.05m）、灰色砂質土（第3層、層厚0.1m）、黄灰色土（第4層、層厚0.1m）、褐灰色砂礫混粘質土（第5層、層厚0.1～0.2m）である。地山は黄色粘土で、現地表面より0.6mで検出した。地山面にて溝4条を検出した。東端のSD-1は検出幅4.5mで、深さは約0.6m、埋土は青灰色極細砂で自然流路と考えられる。SD-2は検出幅約0.5m、深さ0.25m、埋土は黒褐色砂質土である。

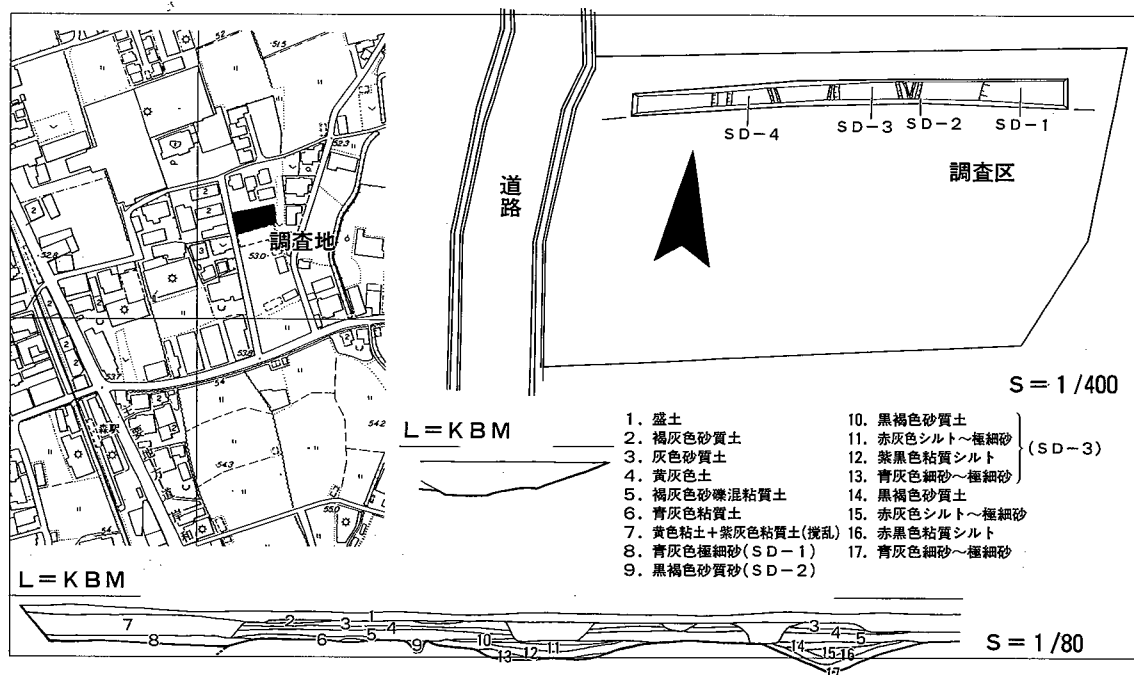


図35 99-37区

SD-3は検出幅約4.5m、深さ約0.4m、埋土は青灰色シルトと紫黒色粘質シルトの互層である。SD-4は検出幅約3.5m、深さ0.6mの逆三角形状を呈している。埋土は黒褐色砂質土、赤黒色粘質シルト、青灰色細砂～極細砂の互層である。いずれの溝も北から南へむかって流れていたようである。遺物は出土しなかった。

今回の調査では南北方向の溝を4条確認した。調査地西側の調査においても同じ南北方向の溝を確認しており、この一帯に溝が集中していたようである。時期については、遺物の出土が無く不明と言わざるを得ない。ただし、埋土の状況から中世以前であることは間違いない。また、当初はもっと高い位置で掘削されたと考えられるが、その後、第4層の耕作に伴い削平されたと考えられる。しかし、その性格や同方向の溝が集中する状況については、解明には至らず、今後の課題となった。(上野)

XV 三ヶ山西遺跡

99-40区の調査

三ヶ山西遺跡は本市内陸部、大字「三ヶ山」、「三ツ松」に存在する。近木川右岸の段丘上に位置する。周辺標高は60～80mを測る。発掘調査を実施したのは貝塚市三ツ松1464-1他である。調査は調査地西側、浄化槽部分に、東西方向、1×5mの調査区を設定し実施した。

調査区内は盛土（第1層、層厚約0.3～0.5m）、灰黄褐色粘質土（第2層、層厚0.1m）の下は東半分と西半分で堆積の状況が異なる。地山は茶褐色砂礫で、西側は現地表面から0.3～0.4mで検出したが、東半分は急激に落ち込んでいる。地山の高い西側には、上からにぶい黄色粘質土（第3層、層厚0.2m）、灰黄褐色粘質土（第4層、層厚0.2m）が堆積している。第3・4層はよく締まっており、盛土して踏みしめたような土である。東側は上から黄灰色シルトブロック混明黄褐色粘質土（第5層、層厚0.4m）の下に、瓦溜まり層（第8層、層厚約0.1m）が堆積する。第8層の瓦

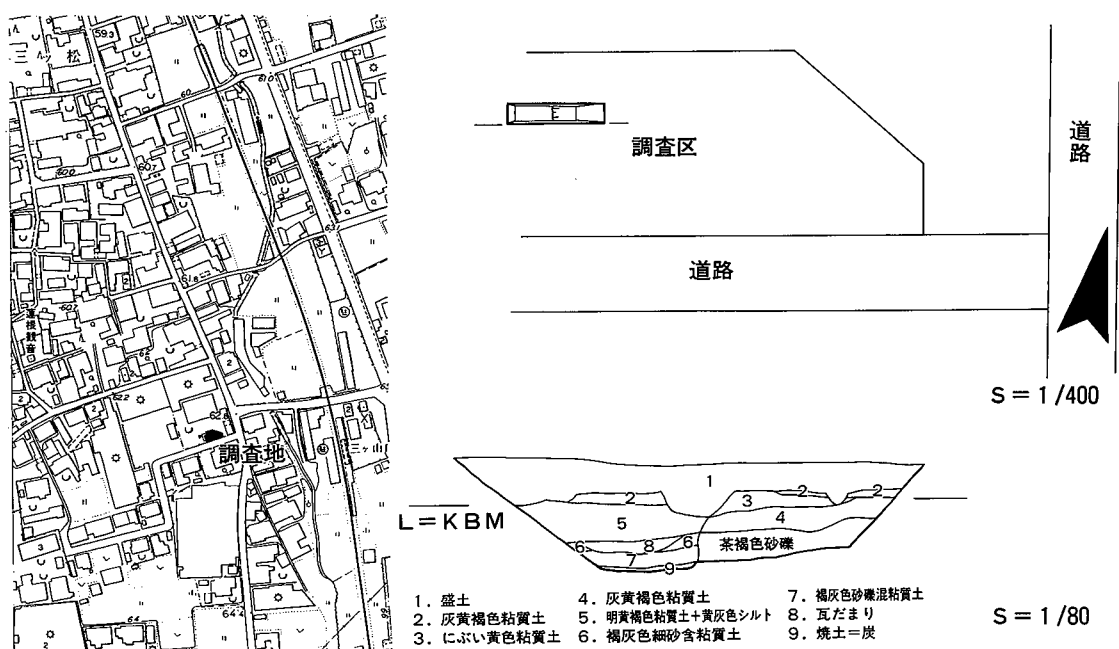


図36 99-40区

は極新しいものである。その下には5・8層に切られて褐灰色細砂含粘質土（第6層、層厚0.1m）、褐灰色砂礫混粘質土（第7層、層厚0.2m）の耕作土が堆積している。時期は遺物の出土が無く不明。中世から近世初頭ではないだろうか。地山直上では炭層が約0.05m堆積している。遺物は盛土より明治頃の和泉音羽焼、瀬戸磁器類が出土した。

断面観察を踏まえて、次のようなことが考えられる。調査地では西から東に向かって低くなっていた。中世から近世にかけて東側の低い部分で耕作を行っていたようである。地山の高い西側では同時期もしくはこれよりも少し後の時期になって粘質土で整地を行っている。現代になって低い部分を埋め、耕作を行ったようである。最下層の炭層については、どのような性格のものであるのか不明であるが、耕作をする前に周辺の草花を焼いた跡の可能性も考え得る。（上野）

99-55区の調査

発掘調査を実施したのは貝塚市三ツ松1472-1である。建設計画に基づき、浄化槽部分に調査区を設定した。調査区内での層状は部分で異なる2面について記す。

北壁

第1層は褐灰色土（盛土）、第2層は褐灰色土（耕作土）、第3層はにぶい黄橙色土（厚さ0.04m）、第4層は褐灰色粘質砂礫（厚さ0.1～0.15m）、第5層は灰褐色砂（厚さ0.1m）、第6層は灰

褐色砂礫（厚さ0.25m）、第7層は褐灰色砂礫（厚さ0.4m以上）である。

南壁

第1、2層は盛土、第3層は耕作土、第4層はにぶい黄橙色土（厚さ0.15m）、第5層は灰黄褐色粘質土（厚さ0.1m）、第6層は灰黄褐色粘土（厚さ0.2m）、第7層は褐灰色粘土（厚さ0.2m）、第8層は灰黄褐色粘土（厚さ0.15m）、第9層は灰黄褐色粘土（厚さ0.1m）、第10層は灰褐色砂礫（厚さ0.8m）、第11層は褐灰色砂礫（厚さ0.5m以上）である。

調査区の断面観察より谷地形であることを確認した。谷の埋土は北壁第6・7層、南壁第10・11層にあたる。上層は粗い砂礫層であり、下層は上層に比べて砂を多く含む。また10~20cmのレキ（川原石）が下層ほど多く認められ、水が流れていたと考えられる。

南壁では流路と考えられる粘土層（南壁第5~9層）の堆積を確認した。この流路は谷の埋没後、西方向に流れていた。北壁では確認できなかった。粘土層より遺物の出土はなかった。

流路埋没後は耕作地として利用されており、近世の耕作土層と考えられる南壁第4層を検出した。流路の堆積層より遺物が認められないため、流路の埋没、耕地の開始時期については不明である。

(木嶋)

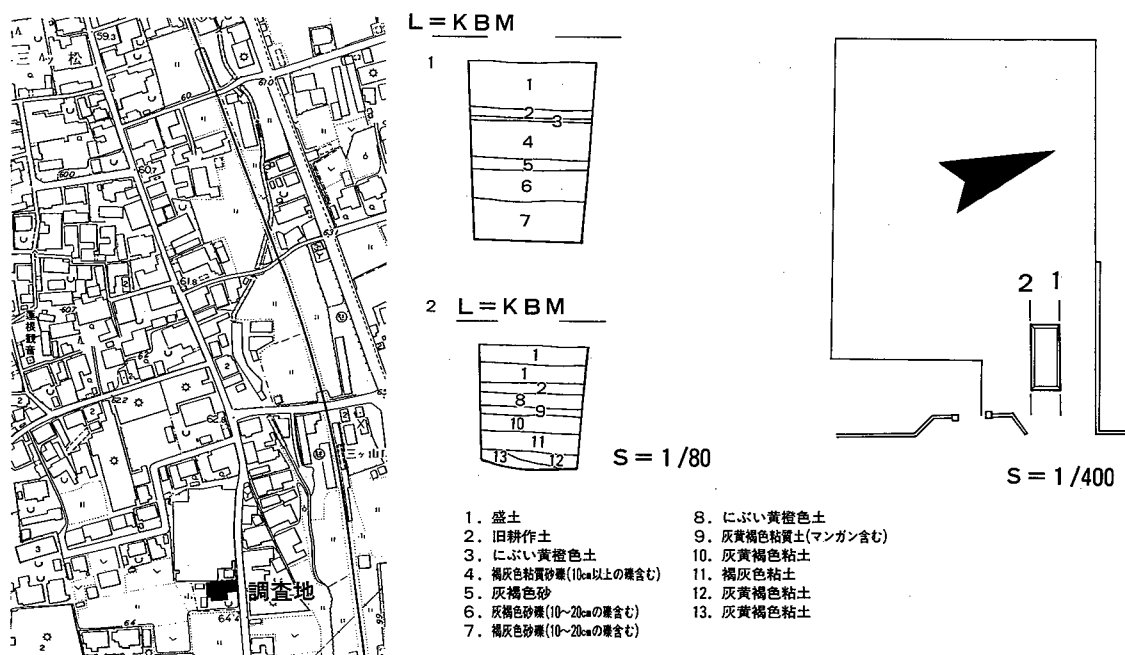


図37 99-55区

報 告 書 抄 録

ふりがな	かいづかし いせきぐんはくくつちう さがいよう							
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要							
副書名								
巻次	22							
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	前川 浩一、上野 裕子、木嶋 崇晴							
編集機関	貝塚市教育委員会							
所在地	☎597-8585 大阪府貝塚市島中1-17-1 TEL 0724 (23) 2151							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 南町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990107.8	14	個人住宅
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 近木	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990323.24	16	個人住宅
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 北町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990705.6	12	個人住宅
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 南町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990712.13	6	個人住宅
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 中	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990803	136	防火装置
かいづかし いせき 貝塚市内町遺跡	大阪府 貝塚市 北町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19990827	1	個人住宅
うみづかい いせき 海塚遺跡	大阪府 貝塚市 海塚	27208	110	34度 26分	135度 22分	19990201	9	個人住宅
うみづかい いせき 海塚遺跡	大阪府 貝塚市 海塚	27208	110	34度 26分	135度 22分	19990913	7	個人住宅
さわしいせき 沢城跡	大阪府 貝塚市 沢	27208	24	34度 26分	135度 21分	19990301	9	個人住宅
はなはいし 秦廃寺	大阪府 貝塚市 半田	27208	10	34度 26分	135度 23分	19990318.19	3	個人住宅
はなはいし 秦廃寺	大阪府 貝塚市 半田	27208	10	34度 26分	135度 23分	19990913	10.25	個人住宅
じぞうどうはいし 地藏堂廃寺	大阪府 貝塚市 地藏堂	27208	8	34度 25分	135度 21分	19990325	4.5	個人住宅
じぞうどうはいし 地藏堂廃寺	大阪府 貝塚市 地藏堂	27208	8	34度 25分	135度 21分	19990830	10	個人住宅

なごせいでき 名越遺跡	大阪府 貝塚市 清見	27208	71	34度 25分	135度 23分	19990401	6	個人住宅
なごせいでき 名越遺跡	大阪府 貝塚市 清見	27208	71	34度 25分	135度 23分	19991018	1	個人住宅
はんたいせき 半田遺跡	大阪府 貝塚市 半田	27208	31	34度 26分	135度 23分	19990329	65	事務所
さわらうどうほらいせき 沢共同墓地遺跡	大阪府 貝塚市 沢	27208	25	34度 26分	135度 21分	19990405	11	個人住宅
いしざいでき 石才遺跡	大阪府 貝塚市 沢	27208	59	34度 26分	135度 22分	19990414	15	個人住宅
はぶいせき 土生遺跡	大阪府 貝塚市 久保	27208	61	34度 27分	135度 23分	19990510	15	個人住宅
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	大阪府 貝塚市 新井	27208	30	34度 26分	135度 22分	19990531	60	宅地
わきはまいせき 脇浜遺跡	大阪府 貝塚市 脇浜	27208	66	34度 26分	135度 21分	19990621	3	個人住宅
わきはまいせき 脇浜遺跡	大阪府 貝塚市 脇浜	27208	66	34度 26分	135度 21分	19990707	9	個人住宅
せらごいでき 清見遺跡	大阪府 貝塚市 麻生中	27208	36	34度 25分	135度 21分	19990622	13	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	大阪府 貝塚市 畠中	27208	23	34度 26分	135度 22分	19990729	4	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	大阪府 貝塚市 畠中	27208	23	34度 26分	135度 22分	19991028	10	個人住宅
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	大阪府 貝塚市 加神	27208	23	34度 26分	135度 22分	19991213	18	個人住宅
もりしもだいでき 森下代遺跡	大阪府 貝塚市 森	27208	100	34度 24分	135度 22分	19990922	10	個人住宅
みかやまにしにいせき 三ヶ山西遺跡	大阪府 貝塚市 三ツ松	27208	69	34度 24分	135度 26分	19990917	5	個人住宅
みかやまにしにいせき 三ヶ山西遺跡	大阪府 貝塚市 三ツ松	27208	69	34度 24分	135度 26分	19991208	6	個人住宅
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
かいづかじないちやういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世	井戸					
かいづかじないちやういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世	整地層		瓦、陶磁器			

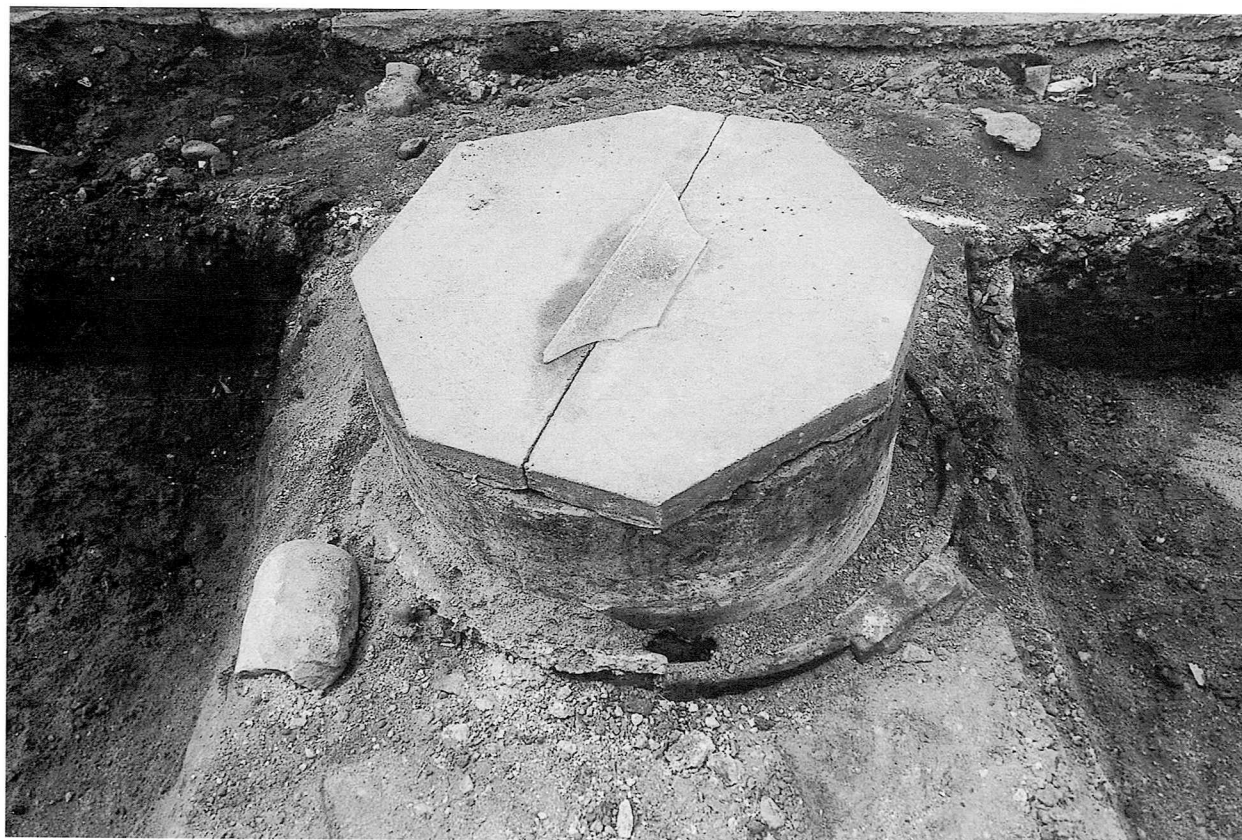
かいづかじないちよういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世			
かいづかじないちよういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世			
かいづかじないちよういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世	整地層		
かいづかじないちよういせき 貝塚寺内町遺跡	城郭寺院跡	近世			
うみづかいせき 海塚遺跡	集落跡	中世	土坑		
うみづかいせき 海塚遺跡	集落跡	中世			
さわしろあふと 沢城跡	城跡、集落跡	中世			
はたはいじ 秦廃寺	寺院跡	飛鳥～平安			
はたはいじ 秦廃寺	寺院跡	飛鳥～平安			
じぞうどうはいじ 地藏堂廃寺	寺院跡	平安時代	土坑		
じぞうどうはいじ 地藏堂廃寺	寺院跡	平安時代	溝		
なごせいせき 名越遺跡	散布地	中世			
なごせいせき 名越遺跡	散布地	中世			
はんたいせき 平田遺跡	集落跡	飛鳥～奈良	溝	須恵器、土師器	
さわきどうぼらちいせき 沢共同墓地遺跡	墓地	古墳～室町時代			
いしざいせき 石才遺跡	散布地	縄文、平安～中世			
はぶいせき 土生遺跡	集落跡	弥生、古墳、中世	流路跡		
にいのいけいせき 新井ノ池遺跡	集落跡	弥生、古墳			
わかばいせき 脇浜遺跡	生産遺跡	縄文～江戸時代			
わかばいせき 脇浜遺跡	生産遺跡	縄文～江戸時代			
せちごいせき 清児遺跡	散布地	奈良～平安時代			
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	集落跡	古墳～室町時代			
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	集落跡	古墳～室町時代			
かじこうざき 加治・神前・ 畠中遺跡	集落跡	古墳～室町時代			
もりしもだいいせき 森下代遺跡	集落跡	中世	溝		
みかやましいせき 三ヶ山西遺跡	集落跡	中世			
みかやましいせき 三ヶ山西遺跡	集落跡	中世	溝		

版 圖



1. 調査区全景

北西より



2. SE-1

北東より



1. 調査区全景

南西より



2. 南側断面

北より



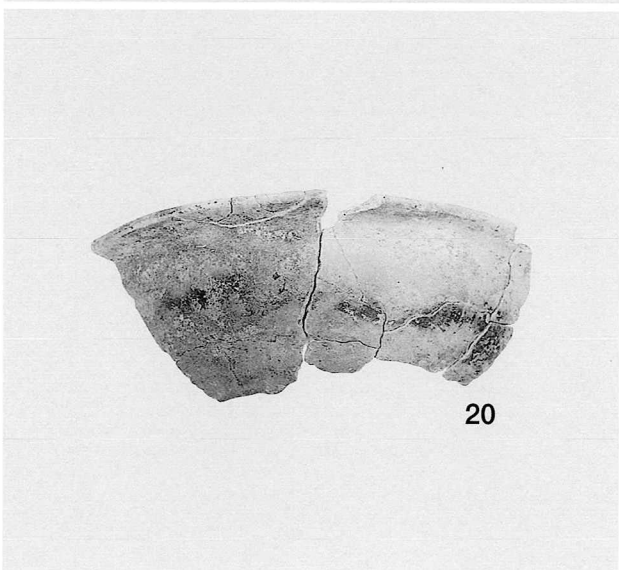
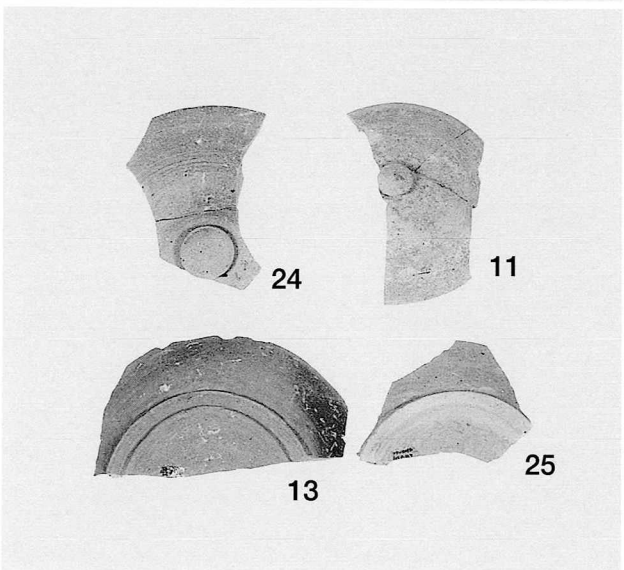
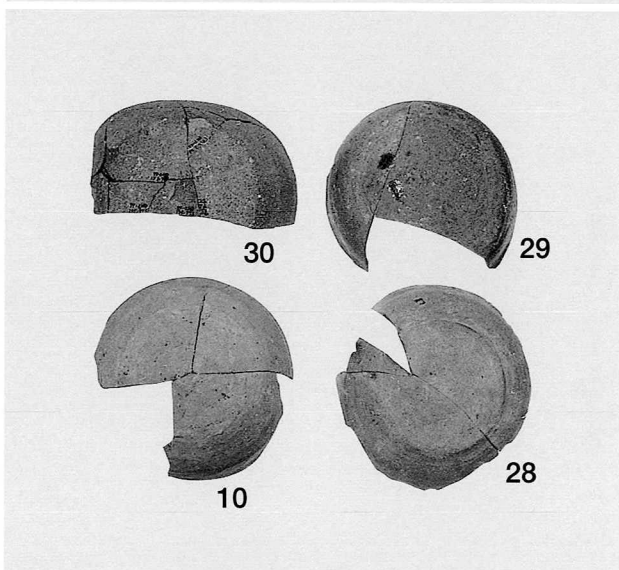
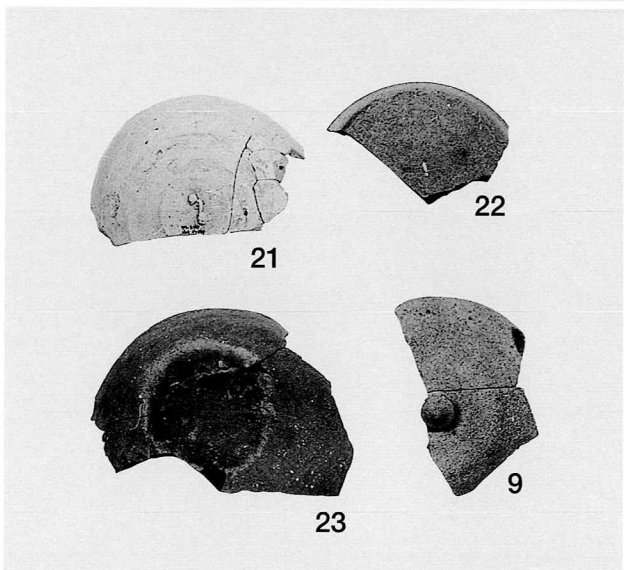
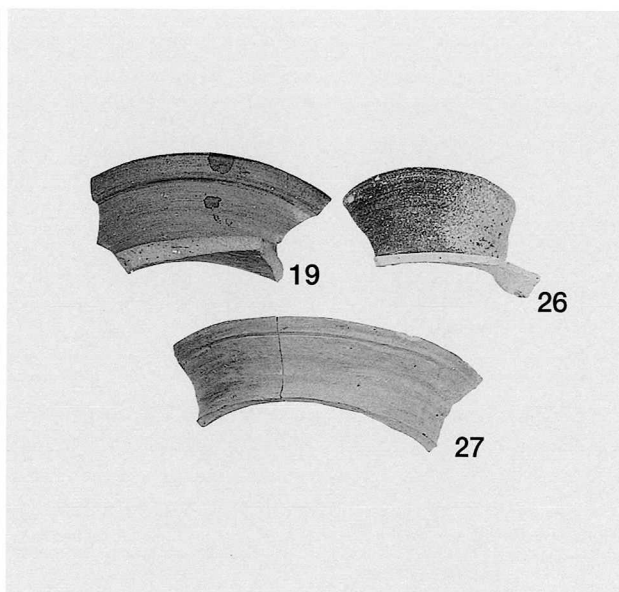
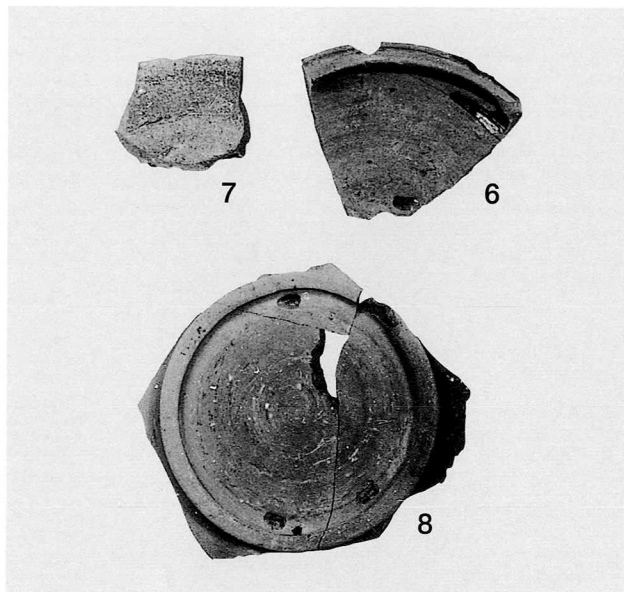
1. 第1調査区 第2遺構面

南より



2. 第1調査区 第5遺構面

北より



SD-3 下層 (6~8)、SD-3 中層 (9、10)、SD-3 上層 (11、13、24、25)、SD-3 (19、21~23、26、27、29、30)、SD-2 (20)、第 2 層 (28)



1. 1区全景

南西より



2. 堤部分

北より



1. 調査区全景

西より



2. SD-4

北西より

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第54集

貝塚市遺跡群発掘調査概要22

発行日 2000. 3. 31

編集・発行 貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市島中1丁目17番1号

印刷 撰河泉文庫(貝塚市北町20-18)